国家、地方社会とジェンダー政策

——戦地金門の女性の役割およびイメージの再現

江柏煒／マイケル・スゾーニ
（阿部由美子訳）

はじめに——戦争史、地方社会および女性

金門は、古くは浯洲、浯江、浯島、滄浯などと称したが、現在は金門本島、烈嶼、大担、二担（今の大胆、二胆）などの群島から成っており、面積は約一五二平方キロメートルである。福建省の厦門湾外、九龍江口に位置し、内に向かっては漳州、厦門に面し、外に向かっては澎湖、台湾を制することができる戦略上の要地である。

第二次世界大戦後、中国国民党と共産党の争いが激化し、米国の斡旋と調停の下に和平会談が進められ協定が締結されたが、双方は一九四六年七月に内戦を勃発させた。一九四九年四月、一〇〇万に近い共産党軍（原文に従う——訳者）が長江を渡り南京、上海、武漢、長沙を相次いで陥落させ、さらに四川、広西などに進撃した。一〇月、中華人民共和国が北京で成立を宣言し、蔣介石は国民党を台湾に遷した。[*1]

一九四九年一〇月二四日前夜、潮州、汕頭から移駐してきた胡璉将軍を司令官とする第一二兵団が金門に到着し、金門の防衛を引き継いだ。その日の夜、約二万人の共産党軍が金門の西北の古寧頭に上陸しようとし、国民党軍（原

文に従う――訳者）と五六時間もの激戦を繰り広げた。[*2] 国民党軍は内戦以来の貴重な勝利を収め、共産党軍の「金門島を手に入れて台湾を解放する」という軍事行動をしばらく食い止め、台湾の国民党政府に一息つかせた。

一九五〇年六月に朝鮮戦争（Korean War）が勃発し、トルーマン（Hurry Truman）大統領は台湾海峡を「中立化」（neutralization）することを決定し、中華人民共和国が台湾を攻撃することおよび中華民国が中国大陸を攻撃することを阻止した。未解決だった中国の内戦問題は国際問題になり始め、さらにスケールの大きい冷戦（the Cold War）の一部となった。[*3]

しかし、台湾海峡の中立化は金門の平和を保証するものではなく、金門での戦争は継続し、一九五〇年七月の「大胆戦役」、一九五四年の「九三戦役」、一九五八年の「八二三砲撃戦」（「台湾海峡危機」ともいう）、一九六〇年の「六一七砲撃戦」「六一九砲撃戦」などが行われた。反共救国軍のゲリラ部隊も金門を基地とし、三回にわたり福建省沿岸の島に突撃し、一九五二年一月の「湄洲島突撃」、一九五二年一〇月の「南日島突撃」、一九五三年七月の「東山島突撃」などが行われた。一九五八年の「八二三砲撃戦」の後は、共産党軍は金門に対して「単打双不打」（奇数日に宣伝用の印刷物を詰めた宣伝弾を打ち、偶数日には停止する）という象徴的な武力威嚇を一九七八年一二月一五日の米中国交樹立まで続けた。

軍事統治下の金門は「三民主義模範県」として改造され、いわゆる「管、教、養、衛」の四大建設の下に政治、教育、経済、軍事などの面で一種の「軍事化されたユートピア的近代主義」（militarized utopian modernism）が作り出された。[*4] そして、一九九二年一一月七日になってようやく四三年にもわたる軍事統治と戦地政務が解除された。

伝統的な金門戦史研究は主に軍の観点やネーションの立場で戦争を記述するというものであり、彼らは敵味方双方の戦略的配置および戦術の応用に関心があり、軍隊の交戦の詳細やその影響を説明し、反共意識と愛国主義を宣揚するというものだった。代表的な著作には国防部史政処の『金門戦役』（一九五七）、国史館の『金門古寧頭舟山登歩島之戦史料初輯』（一九七九）や『金門古寧頭舟山歩島之戦史料続輯』（一九八二）などがある。戦地政務時期のものには許如中が編修した『新金門志』（一九五九）があるが、軍事教育的な色彩が強く、軍がいかにして金門の建設を行ったかという成果をおおいに賞賛する内容になっている。英文の著作では、金門は、米国の外交政策史、米中台関係史および現実主義（realism）、軍事威嚇（deterrence）、戦争瀬戸際政策（brinkmanship）といった理論研究の課題において広く重視されている。[*5]

冷戦の終結と国共の対立の緩和、戦地政務の解除、文献・

檔案の公開に伴い、金門の戦争史に関連する研究には四つの傾向が現れるようになった。第一に、通常の軍事史研究の角度からの問いかけではあるが、海峡両岸の文献、檔案、新聞を引用、比較し、異なった政治的立場から戦争の背後の政策決定過程を分析するようになった。[*6] 第二に、当時金門で服役していた士官・兵士から口述資料（オーラル・ヒストリー）を収集するようになった。[*7] 第三に、通常のナショナル・ヒストリー、軍事史の型から脱して、人類学研究と社会史から軍事統治下の地方社会の文化変遷に注目するようになった。[*8] 第四に、戦争遺産保護を目的とした関連研究がなされるようになった。[*9]

これらの異なる傾向の研究成果は、金門研究にまったく新しい視野を開くものである。それと同時に、冷戦構造と両岸関係のネットワークに組み入れられた二〇世紀後半の金門の地域史は、グローバル・ヒストリー、ナショナル・ヒストリーと相互に影響し合い、相互に因果関係をなしている。金門の地域史を叙述する意味は、伝統的な戦争史研究の中で見落とされていた地方社会およびその住民を再現し、戦時体制下における彼らの特殊な社会組織、日常生活、文化習俗の変遷を理解し、国際関係、国家、地方社会の三者の相互作用を分析することにあると、筆者は考えている。

軍事政権は外部の国際情勢と地政的な防衛の配置を進めなくてはならない以外に、地方社会と軍隊の統治、動員、教化も進めなくてはならなかった。戦地経済の近代化および民間防衛自衛隊の組織という政策の下では、女性もまた国家に動員され、特殊な役割を与えられてきた。また、戦地社会では性別構成のアンバランスがきわめて顕著になり、軍隊の風紀は地方の女性の安全を脅かし、さらに軍隊と民間の感情的な揉めごとが起こったので、国家はこれらの課題を認識し、答えを出すことを迫られた。ジェンダー（gender relations）と性（sexuality）は戦地社会内部のガバナンスの重要課題となった。

本文の意図は、ジェンダー政策の誕生と実践を通じて、国家がいかに戦地の女性の社会的な役割とイメージを規範化し再現したのか、また地方社会がいかにしてそれに応えたのかという歴史的過程を分析することにある。まず、生産者と再生産者としての女性を探究する。国家は彼女たちに勤労服従、敬軍愛国というイメージを与え、国家の政策の象徴とした。次に、一歩進んで国家による女性の民間防衛体系への編入について論じる。一種の軍事化されたイメージを創造することにより戦地の精神を再現し、また「改正風俗」の名の下に女性の身体美学を規範化した。この他、前の二者と相反して、柔美な女性は情欲の対象の再現とされ、国家がコントロールするレジャー娯楽の対象となり、地方経済に運用されるところとなった点を指摘する。最後に、これらの女性の役割とイメージの再現の

分析を通じて、戦地社会の地方政治政策における軍事化（militarization）／近代化（modernization）／ジェンダー（gender relations）間の三者関係を理解する。

Ⅰ 生産と再生産の役割における模範女性

1 家事労働から増産報国へ
——戦地経済政策下の労働女性

金門は沿海地方であり、早い時期には砂嵐の害をひどく受け、また土地がやせており、水利が豊かではないために、島民の多くは塩作り、近海漁業、雑穀栽培を主要産業とし、そうした生産物をよその土地から供給される白米と交換してきた。近代になり、大量の青年が南方に渡って生計を立てるようになり、地方経済は海外華僑の送金に高度に依存し、生産環境は相当に苦しいものであった。

一九四九年以降金門は戦地になり、一方で華僑送金は以前には及ばなくなり、地方経済は大きな影響を受けた。また、大量の軍人がやって来て、民生物資の供給が緊急の問題になった。生産量を向上させるため、軍は専門の機関を設け、農業、林業、漁業、畜産業を積極的に改良し、自給自足という目標を達成しようとした。[*10] 戦地民生工業の推進にも効果が現れ、金門高粱酒はその中でも最も成功した産業になり、金門の農業の発展を導いた。「一斤の高粱（および大麦、小麦）を一斤の白米と交換する」[*11]という政策のもと、政府は農民が高粱、大麦、小麦およびその他の経済作物を栽培するのを奨励し、これらの穀物を公営の酒造工場に供給して酒造りの原料とし、財政の自主性を打ち立てた。また、金門のもうひとつの軽工業である陶器工場（一九六三年設立）も高粱酒の容器を製造するために設立されたものである。

金門の農業、漁業家庭では、既婚女性の多くが家事労働と家計生産の両方を考慮しなくてはならなかった。一人の女性の日常生活はほとんどが同じモデルである。三食の料理をし、舅、姑、夫に仕え、子どもを育て、洗濯、掃除等の家事労働をし、それが終わると畑で手伝いをするか海岸で牡蠣や海草を採ったり、また豚、牛、鶏を飼わなくてはならない場合もあり、余った時間には衣服を縫ったりしていた。それぞれの家庭の運営と結び付いた重要な役割を女性が担っていたが、それは当たり前の「天職」と見なされていた。

しかし、ひとたび国家が政治的な需要を持つと、勤勉な女性の労働のイメージは戦地精神に結び付けられるようになった。農漁業技術の改良後、豊作の光景は戦地社会の豊かなイメージを伝達することができるものとなり、女性の

イメージは一種の隠喩効果を備えた主題となった。軍が撮影した一九五〇年の海岸の写真では、烈日の下で男性一人と女性一人が懸命に魚網を補修しており、戦地の生活の「苦しみを恐れず、困難を恐れない」という意志の力を伝えている（写真1）。一九六九年の『金門日報』は烈嶼郷のトウモロコシの豊作の光景を載せた。四人の人物が椅子に座っており、傍らはすべて畑からとれたトウモロコシであり、一人の年長の女性と二人の未成年の女の子がトウモロコシの皮むき、分類、実の取り外しに精を出しており、男の子は好奇心をもって頭を上げてレンズを見つめている（写真2）。彼女らはみな沈黙する労働者であり、女性特有の忍耐力で、細かく面白みのない仕事を繰り返しおこないつつ、家の子どもの面倒を見るという職責を果たしていた。写真が再現している時代の意義は、国家の農漁業政策の成功によって彼女たちの衣食は足り、また彼女たちも国家の期待通りに、自分の身をわきまえ、勤労、服従し、増産して国に報いるということであった。

国家は意識的に伝統的な経済活動と国家の大事件の連結を再現しようとしただけでなく、地方社会の異なった経済の変化を宣伝しようと試みたが、そこには女性の経済的役割の転換も含まれていた。例をあげると、一九五〇年代後期には国家が女性に料理、裁縫等の職業訓練を提供し、彼女たちが職場に入ることを奨励した。[*12] 軍は貧困家庭の女性のために「家事講習班」を開講し、彼女たちにミシンの操

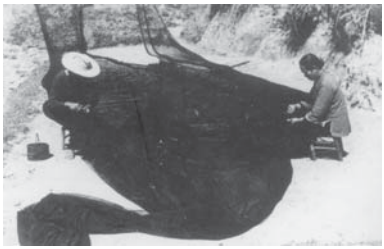

写真1 1950年代の魚網の補修（金門県政府「胡璉将軍珍蔵文物、写真類」編集番号E068）

写真2 烈嶼郷でのトウモロコシの豊作を示す農作業の光景（『金門日報』1969年7月4日第2面）

写真3「貧民自助縫紉班」での労働女性（『正気中華日報』1963年5月3日第4面）

作を学習させた（写真3）。また民生工業の人材需要のために、金門高粱酒工場などでは、女性労働者を雇って低技術の仕事を担当させた。写真では二列の女性が厨房の隅に座り、男性技術者が機械を操作する画面の後ろに隠れて、酒瓶の中に不純物がないか目で確認し、包装を行っている（写真4）。一九七七年、西園塩場の製塩加工工場が開設され、食用精製塩を生産して軍と民間に供給した。製塩工場は数名の地元女性を臨時労働者として雇用し、精製塩の包装作業に投入した（写真5）。女性は工業生産ライン上の一部となり、勤労で細心であり、増産によって国に報いるという時代の雰囲気を再現した。しかし農漁業生産であれ工業生産であれ、当局のレンズの向けられている労働女性は決して主体性を持っているものではなく、さらに真の社会的脈絡（social context）の外に置かれたものだった。彼女たちは国家が「戦地政務実験区」および「三民主義模範県」の政策の成功を宣伝する一種の記号と象徴となった。

このほかに、国家は女性の細心で温和な特質をよく利用し、政策執行過程で直面する可能性のある衝突を処理した。高粱や大麦、小麦の収穫時期には、酒工場は人と車両を派遣し各郷鎮を巡回して収集、計量、記録を行い、さらに農民組合に台帳を渡して白米と交換する。しかし、女性の経済機会は実際はある種の小さな範囲、つまり当局（あるいは男性）が認定し、想定する適当な職場の役割に限定されていた。一九七二年六月と七月の『正気中華日報』にそれぞれ掲載された二枚の写真は、女性労働者が「乾湿度計測器」で、民衆が交換に来た大麦、小麦を検査する様子を記

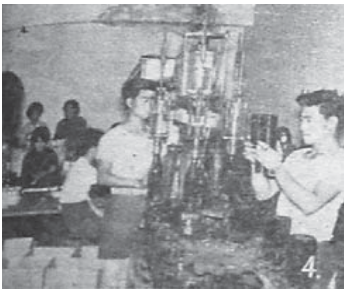

写真4 金門酒工場の生産ライン（『正気中華日報』1969年11月27日第2面）

写真5 精製塩加工工場で包装に従事する女性労働者（『金門日報』1978年1月6日第2面）

写真6「小麦の花」による穀物の乾湿度検査（『正気中華日報』1972年6月15日第2面）

写真7 金門高粱酒工場の女性技術員（『正気中華日報』一九七二年七月一〇日第二面）

録している。彼女たちは微笑を浮かべ、親切かつ専門的に仕事を行い、その中の一枚は「小麦の花」と命名されている（写真6、7）。実際のところ、このような仕事は農民の権益に関係しており、いつも勘定が細かく、容易に争いが起きるものだが、女性が国家と地方社会の仲介者となり、性別の特性による優勢を発揮し、国家が与えた役割を忠実に果たした。

2 〝家〟から〝国〟への責任
――「模範的女性、模範的母親」の選抜と「軍服縫製」運動

しかし、女性の就業の提唱は女性の家事の役割の再評価にはならなかった。むしろ、これらの〝あたりまえ〟と思われ続けた功能は、家庭福祉のみにとどまらないものとされ、さらに国家目標への貢献に結びつけられた。いいかえれば、軍事の近代化は家事労働の政治化の過程に関わっていた。

一九五〇年代中期から、戦地女性の模範的なイメージを作り出すために、金門では国際女性デーや母の日等の国が定めた記念日に「模範的女性、模範的母親」の選抜を行ったことも、その一例であった。選抜過程は下から上にという推挙方式を採り、まず村の役場で名簿を作成して郷鎮の役場に送り、さらに軍に隷属する県政府に送り決定する。入選者は軍によって県政府で表彰され賞状が贈られ、また個人の事跡が『正気中華日報』と『金門日報』に掲載された。

模範的女性であれ模範的母親であれ、漢人の伝統社会の女性の「夫を支え、子どもを教育し、よく家事をする」ということの再生産（reproduction）の領域に対する期待のほか、彼女たちの生産事業、公益事業における姿勢、および「敬軍、愛国」という政治的忠誠度もまた検査されていたのである。さらにいえば、国家は女性が職場に入り、困難を克服して生産し、「一族と親睦し、問題を解決し紛争を調停する」という男性の地方有力者の役割を演じることを奨励し、また愛国主義的な情操を展開し、女性を家庭での役割から引き出して、男性と同様に公共の事務に参与させることを試みた。しかし詳細に研究すると、この過程は近代的な意味を持った女性解放運動ではなく、反対に女性はさらに重く、さらに不平等な圧力の中に陥れられたことがわかる。例をあげるならば、模範的母親の基本的な資格は三人以上の子女がいることであり、多産を奨励する政策態度を反映していた。「子女を教え導き功績をあげた者、功績の著しい者」という評価は、子女が軍隊に入ることを奨励するものであった。さらに「政府が推進する政令に協力し、本県の新村建設および環境衛生整理を実践する」ことに適合しなくてはならなかった。これらはみな国家が戦

地社会の良妻賢母に対する新しい要求を示すものであった。家庭を管理し、さらに国家に服務しなくてはならず、さらに進んで「良妻賢母で救国保種で良好な公民」という役割をこなすことを期待された女性は、〝家〟から〝国家〟に至る重大な責任を背負うことになった（表1）。

これらの模範的な女性像は、まさに蔣介石夫人宋美齢が一九五四年三月八日の国際女性デーの慶祝大会で述べた、〝家〟と〝国〟の双方に責任をもつ女性像に対応している。

全国の姉妹のみなさん！　我々の民族の偉大な精神、さらに我々の高尚な倫理道徳、この倫理道徳は実に我々中華民族五千年の歴史の結晶でありますが、それに基づいて我々中国がこれまで育んできた女性の崇高な観念は良妻賢母でした。しかし我々は今、反共反ソ反攻復国の時代に生きています。我々はさらにこの倫理道徳概念、良妻賢母の家族愛を民族愛に拡充し、さらにこの良妻賢母の家庭愛を国家への愛に拡充しなくてはなりません。つまり我々女性は、母であれば岳飛の母のように、妻であれば韓世忠の妻のように、子ど

表1 金門の模範的女性、模範的母親の選抜資格と基準

	基本資格	選抜基準
模範的女性	20歳以上の女性で（既婚、未婚は問わず）、行為が正しく悪い嗜好のない者	1. 国家への忠愛を具体的な事実によって表現している者。 2. 軍を敬う模範で郷土で表彰することができる者。 3. 公務員、教師で、成績優秀であり、所属機関から奨励のある者。 4. 公益に熱心で郷土で尊敬される者。 5. 苦労を厭わず労働し、生産事業に努力し成績優秀な者。 6. 夫を支え子どもを教え、よく家事を行う者。
模範的母親	本県に六ヵ月以上居住し、50歳以上で、子女が3人いて品徳に優れ、身体が健康な者	1. 若くして夫を失い、子どもを育て上げ、教養のある大人で、村で賞賛される者。 2. 夫を支え、子どもを教育し、よく家事を行い、一族を親睦させ、村で模範となる者。 3. 苦労を厭わず労働し、生産に励み、また村の生産建設に協力し、生活水準を向上させた者。 4. 問題を解決し紛争を調停し、善いことのために忠言し、子女が功績をあげるように教え導き、顕著な業績をあげた者。 5. 国を愛し軍を敬う上で具体的な業績があり、敬軍の模範となったことのある者。 6. 政府が推進する政令に協力し、本県の新村建設および環境衛生整理を実践する者。

出典：1957、1961年の『正気中華日報』に基づき整理。

もには民族に孝を尽くすように教え、夫には国家に忠を尽くすように勧める、それこそ我々現代女性が追及する模範と観念です……。

今日の女性は時代の要求により二重の責任を負わなくてはなりません。家庭を守るとともに国家に服務する。このために自己を充実させ、自己を敬愛し、現代女性となり、「良妻賢母であり、救国保種でもある良好な公民」であるという目的を達成しなくてはなりません。[*13]

世界の他の社会からすると、女性が近代化の過程で家庭の内外の〝二重の責任〟を担うというのは容易に理解されることだろう。しかし軍事の近代化の必要のために、戦地で生じるこの種の二重の責任は、女性が国家のために奮闘するという特殊な貢献であった。「軍服縫製」運動は〝良妻賢母〟イメージの具体的な政治実践だった。この運動の発端は宋美齢が指導する「中華婦女反共抗俄聯合会」（以下婦聯会と略す）の活動のひとつであり、その目的は「女性の力を団結させ、反共反ソで勝利を収める」というものだった。一九五〇年四月一七日に婦聯会は台北で正式に成立し、その影響力を拡大するために、二ヵ月に満たない時間で分会三四、支会五四、工作隊四隊を設立した。県・市政府に属するものは一六、軍事機関に属するものは一一、行政機関に属するものは五つ、学校に属するものは二つだった。戦地である金門では福建分会（一九五〇年五月二一日設立）、金門防衛司令部分会（一九五〇年六月九日設立）、怒潮分会[*14]（後に金門防衛司令部分会に編入）と金門防衛司令部分会に所属する支会の三つが設立された。[*15]金門は首都の台北を除くと、分会と支会が最も多い県市であり、戦地社会の動員が台湾本島と比べてさらに徹底していたことが明らかで、また金門の各分会の主任委員には当時の金門防衛部司令胡璉将軍の夫人胡曽広瑜があたっていた。

婦聯会の仕事の重点は、主に軍人を慰労し、遺族を扶養し、軍、公務員、教員の家族など特定の社会集団の世話をすることであり、また前線の作戦が必要とするものに適合させることであった。設立大会では各界が二〇条の提案を決議し、そのうち一一条以上は仕事に関するものであり、以下の内容を含んでいた。（一）軍服縫製工場を設立し、傷兵慰問隊および出征遺族訪問隊などが反共反ソに利をもたらすよう求める。（二）孤児院を広く設立する。（三）本会に生産小組ひとつを設立し、常に軍、公務員、教員の家族を指導して手工業生産に従事させ、外貨を獲得し生活を維持する。（四）各地に散在する生活能力のない軍人家族を東部の花蓮および台東の二県に移住開墾させ、生活を維持し、士気を向上させ後方を安定させる。（五）士気を奮い立たせ、将兵の子女の教育に対する憂慮を軽減するため、入学費用の免除と出征兵士家族および遺族のための学

校を開設することを求める。（六）婦女界を動員して傷痍軍人を慰労する。（七）基金を設立して、生産事業を起こし、工場を設立する。（八）各階層の女性同胞を動員して一人靴一足を前方に送る運動をするように求める。（九）本会が被服工場を設立し、なるべく軍人家族に仕事を担当させるように求める。（一〇）縫製工場を設立し、各機関、学校に手紙を送り制服の縫製を請け負い、失業した軍人家族を救済する。（一一）食糧の増産を積極的に行い、前方の作戦の需要に応じる。[*16]

一九五〇年四月二七日、宋美齢は自ら縫製して軍を慰問した。このニュースはメディアで広く報道され、漫画にも描かれ、字の読めない女性にも総統夫人でさえも模範となり、労働して国に報いるという高尚な品徳を示しているということを感じさせた。漫画の中の宋美齢の表情は穏やか、かつ控え目で、集中し熟練した様子でミシンを操作し、良妻賢母のイメージを伝えている（写真8）。一九五〇年五月から、金門では猛烈な勢いで軍服縫製と軍人のための洗濯運動が展開され、軍の新聞は民間が婦聯会の政策に熱心に対応したという光景（写真9）[*17]、および軍人が慰問を受けて感動し、士気が上がったという印象を作り出した。[*18]疑問の余地もないことだが、「軍服縫製」運動の政治効果は、「敬軍愛国」を宣伝するのみならず、平凡な家庭労働が、無意識の感化という意識形態を通じて、二者――動員される女性と恩恵を受ける軍人――を教化しているのである。宋美齢は良妻賢母の模範的な原型（prototype）を作り出し、〝国家の母親〟になり、前線に出兵する将兵を気にかけた。この種の〝天下の模範となるべき母親〟というイメージの力は、民間の女性はみな立ち上がるべきであり、軍人は忠義を尽くして国に報いなくてはならないということを暗示しており、忠孝という倫理に符合する道徳政治観を打ち立て、国府統治の正当性を強化しようとするものだった。

しかし、金門の女性にとっては、これらは間違いなく負担の増加になった。彼女たちは家で夫や

写真8 蔣夫人（宋美齢）が自ら衣服を縫製し軍人を慰労するという漫画（梁中銘「半週新聞人物―蔣夫人親製衣褲勞軍」、『中央日報』1950年5月1日第9面）

写真9 金山民防大隊の女性による軍衣の縫製（『正気中華日報』一九六三年六月二五日第四面）

子どもの世話をし、家事労働を負担する以外に、国家の政治運動に巻き込まれて別の男性の一群――前線を防衛する軍人――の世話をして、国家に対する忠誠を示さなくてはならなくなった。戦地の〝模範的女性〟の意識形態は、一種の父権体制の下での新しい圧迫であり、決して男女平等という近代的意味を持ったものではなかった。このため、金門の女性が直面したのは普通の〝二重の責任〟ではなく、家族、軍人、国家に服務するという〝三重の責任〟であった。後述するように、女性たちは国家によって直接的に動員されたのであった。

Ⅱ 軍事動員と身体的な教化を受けた戦地の女性

1 教育班から民間防衛自衛隊へ
――女性の軍事動員

一九五〇年代初め、「全民武装、全民動員、全民戦闘」の呼びかけの下、金門の住民は性別、年齢、職業などに応じて防衛戦力に組み入れられた。民間防衛体系の実施の前に、女性の動員はすでに始まっており、まず女性教育班という名義で、識字教育と救護訓練を主とする課程が行われていた。一九五一年三月五日の『正気中華日報』には、「金門の行政機関は女性教育を普及させ、反共反ソの意識をはっきりさせ、軍隊にあわせて戦時の任務を担当させており、最近は区を単位として各区の中心の学校の中に婦女教育班を設立することを決定した……三ヵ月を一期とし、一八歳から四五歳の家庭の女性を一律に参加させ、……その主な課目は識字教育と救護訓練の二種類である[*19]」。理由なく欠席した者は罰金を科され、また「期間中は、一月ごとに一度試験をされ」、訓練は厳格で、特殊な事情がないかぎり、一八～四五歳の女性は全員参加しなくてはならなかった[*20]。

基本的に、教育訓練班の目的は軍事動員にあり、教育啓蒙という近代的な意義はなかった。最初に婦女隊を組織した際、「言葉が通じず、風俗が異なり、困難が非常に多かった[*21]」ために、識字教育をして動員が十分にできないという問題を克服しようとした。救護訓練は女性が戦争で負傷兵や怪我人を救護することに協力できるように期待された。教育班では反共の読み物を読み、女性に政治意識を教え込むようになっていた。

一九五三年から、軍は金門県民防指揮所を設立し、住民の軍事編成を拡大し、治安の維持に協力させ、軍事作戦を支援させた。一九五七年一二月、国防部は『金馬地区各県民防総隊編組辦法』を公布し、翌年四月には「民防総隊」を編成した。一九六七年五月には、「民防指揮部」に改称

し、指揮官は依然として県長が兼任した。一九七一年一一月、国防部は再び「民防指揮部」を「民防総隊」に改めた。一九七三年、台湾省の各県市の民防機構は整理統合され、金門と馬祖の民防隊だけが残され、金門では「金門県民衆自衛総隊」に改められ、部隊直轄となった。[*22] 郷鎮の役場には自衛大隊、行政村には自衛中隊、そして〝戦闘村〟[*23] には自衛区隊が設立されるなど、階層ははっきりとしていた。毎年八日間の訓練と、季節ごとの訓練一六時間および必要な専門の訓練が行われた。すべての訓練、演習は農閑期や漁業閑期を利用して行われ、生産に影響を及ぼさないようにするというのが原則だった。[*24]

民間防衛は普遍的に見られる責任ではあるが、女性の地位はやはり特別なものだった。伝統的な観点では女性の生理的性別が女性の公共的な役割を作り出すとされる。しかし、実際はそうではなく、この性別による役割分担は、国家による〝自然化〟の過程を経たものであり、軍事統治の過程で想像、創造されたものであった。これらの具体的な軍事編成には以下のものがある。一九五八年、婦女隊が一八～三五歳の身体健康な女性によって組織され、政令および規約の宣導、防諜、慰問および負傷者の救護、老人や体の弱い者の扶助、児童のしつけ、軍事勤務の補助などの仕事をした。予備隊は一六～一七歳の若い女性によって組織され、見張り、検査、防諜、通信、政令および規約の宣伝などの任務に協力した。一九六七年の民防指揮部の組織では、一七～三五歳の女性が婦女分隊に編入され、救護処理と政治戦、心理戦の宣伝の呼びかけの任務を担当した。一二～一七歳と三六～五五歳の女性は予備分隊に編成され、人員の避難、検査、防諜、通信、政令の宣伝などの任務に協力した。一九六八年に戦闘村が設けられると、村の一六～三五歳の未婚の女性住民は守備隊を編成し、村の自衛戦闘と反降下作戦、軍事勤労支援、捕虜の監視などの任務を担当した。一八～四五歳の既婚女性は勤務隊に編入され、戦闘中の心理戦による宣伝呼びかけ、文章宣伝、負傷者救護などの任務を担当した。一二～一五歳の若い女性は幼獅隊に編入され、戦闘中の検査、巡回、交通管制、伝令などの任務を担当した。その他の老人や身体の弱い者や子どもは、疎散隊に編入され、戦闘が発生した時に人々を引導して避難させた。[*25] また反共意識の植え付け、機密保持、防諜、指導者への忠誠等の政治教育を行った。

戦地政務時期のメディアでは、闘志を高揚させ、整然画一とし、規律が厳格な女性のイメージが再現された。彼女たちの大部分の訓練課程は男性の自衛隊員と違いはなく、国家の祭典や外賓の訪問の際にも、女性自衛隊が銃器訓練や行進儀式を披露した。一九七二年九月三日の軍人節では、男女の自衛隊が初めて台湾に赴き国軍運動大会で銃を持った行進に参加し、一〇月には再び建国記念の行進に参

写真 14 救護課程の訓練（『正気中華日報』1964 年 3 月 28 日第 4 面）

写真 15 烈嶼駐留軍が婦女隊に救護技術指導（『正気中華日報』1968 年 9 月 5 日第 2 面）

写真 16 婦女隊の歩調練習（『金門日報』1969 年 3 月 14 日第 2 面）

写真 17 金城の民防隊員（『正気中華日報』1968 年 12 月 2 日第 2 面）

写真 10 幼稚園教師の射撃訓練（『正気中華日報』1965 年 7 月 4 日第 2 面）

写真 11 金城鎮の民防婦女中隊（『正気中華日報』1963 年 10 月 10 日第 4 面）

写真 12 1970 年代の心理戦における宣伝呼びかけ訓練（金門県政府「胡蓮将軍珍蔵文物、写真類」編集番号 E075）

写真 13 1980 年代初期の銃器訓練（翁沂杰提供）

写真18 建国記念行進に参加する自衛隊（『正気中華日報』1972年10月16日第2面）

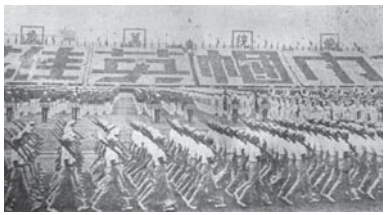

写真19 九三軍人節の行進に参加する金門の女性自衛隊（『正気中華日報』1973年9月11日第2面）

加した。翌年の軍人節では、三百人の女性自衛隊員が単独で銃を担いで行進した。一九七四～一九七八年の間、建国記念の閲兵儀式に、毎年二五六～四百人の男女の隊員が派遣された。彼らは厳格な訓練をつんで、台湾に赴いて建国記念式典に参加し、「陣容も壮大で、士気が高揚したため、各級の長官および内外の来賓の賞賛を深く得た」[*26]。女性自衛隊員の選抜には細心の注意が払われ、外見が端正で、身長一五八センチ以上の者が選ばれた。当時、全国のテレビ番組の放送を通じて、金門の女性自衛隊員の軍事化されたイメージは、広く国民に知られ、〝戦地金門の精神〟を再現するのみならず、強大な〝自由中国〟の象徴ともなった。毎年行われる女性自衛隊の建国記念行進での実演は、愛国主義を促進する一種の文化儀式になった（写真10～19）。

2 動員された女性
――抵抗、離散、順応、帰属意識形成の経験

しかし、女性の軍事動員には、当局の論理と政策に少なくとも二つの矛盾が存在した。

第一に、理論的には、民防隊は自発的な民兵であり、国家が任務を与えて派遣するもではない。当時、国家は〝国難に共に立ち向かう〟ということを政治宣伝しており、全国民の民防隊への支持を作り出そうとしていた。しかし、実際のところ、金門の民間防衛訓練は強迫的な義務であり、心身が任務に堪えない、在学中の学生である、妊娠している、乳児の世話をしなければならないなどの特殊な事情がなければ、女性たちは逃れることができなかった[*27]。さらにひどいのは、一種の強迫的な義務であるのに、住民が訓練を受ける過程での基本的な権利の保障を軍は回避し、彼らに自分で駐屯地に行くよう要求し、昼食も提供せず、自費で制服を作らせた。このように地位、権利が正規の軍人に及ばない差別的な待遇を受けた民防隊員は自らを嘲笑して「八〇五部隊」と呼んだ[*28]。

第二に、国家は「全民武装、全民動員、全民戦闘」を呼びかけていたが、実際は依然として〝自然化〟されたジェ

ンダー分類意識（a naturalized classification of gender）があり、女性の軍事的な任務は男性とは同じではなかった。また、年齢以外にも、既婚、未婚の違いが軍事編成上の分類に用いられ、それぞれの任務はおおいに異なっていた。[*29] もちろん、これらの分類は地方社会の反発を避けるためのものであるが、結局のところ既婚女性は家事労働での役割がすでに大きく、もし同じような軍事任務を与えたら、必ず家庭の日常生活の運営に支障をきたしてしまう。このため、〝性別を分けない〟という全民動員の理論はただのスローガンにすぎず、軍事化の過程で国家は性別分類の操作に介入したのであった。

これらの理論と政策上の矛盾は、女性に軍事動員に抵抗する機会と空間を提供した。呂静怡へのインタビューによると、一九七〇年代以前、金門の女性は妊娠六ヵ月になってからようやく「訓練」の免除を申請することができた。一九七〇年代からは婚姻状態にあれば「訓練」に参加しなくてもよくなった。[*30] そのため、早く結婚してなるべく早く妊娠することが女性が軍事訓練から逃れる方法のひとつとなった。

乳児を養子にするのも訓練から逃れる方法のひとつだった。規定では、五歳以下あるいは七歳以下の子ども三人を育てている母親は編入されなくてもすんだ。そのため、養子の名目で親戚友人に乳児を借りてきて戸籍に登録し、訓練免除の条件に合わせるという状況が生まれた。そのほかに、もし台湾に行って仕事をする申請をして許可を得られれば、軍事訓練を免れることができた。当時、民間防衛訓練は多くが旧正月前に行われたため、台湾で仕事をする女性は家に帰って年越しをすることができなかった。そうでなければ民間防衛の義務を負わなくてはならなかったからだ。家族が病気になったり死亡してようやく、彼女たちは故郷に帰り、家族の世話をしたり葬儀に駆けつけることができた。平時、女性は月経が来たことを理由に、数日間一時的に軍事課程から逃れることができた。戦地社会の軍事動員制度は一部の女性の婚姻、妊娠などの生命周期に影響を与え、あるいは家族編成を変え、また同じ国にいるのに家があっても帰れないという特殊な離散経験をもたらした。さらに重要なのは、ジェンダー政策は国家が用いるものだけではなく、反対に女性が国家の政策に抵抗する策略手段になったということである。

女性が軍事訓練を受けることになると、往々にして家事労働との間で摩擦をおこすところになり、彼女たちの負担を増大させた。訓練期間中、彼女たちは睡眠時間を短縮し、朝四～五時に起きて急いで家事を行い、あるいは農作業や海での牡蠣採り、家畜の飼育などをしてから、八時の集合時間に駆けつけた。女性の中には体力が十分ではなく、あるいは家事を気にかけて、訓練の過程で成績がよくなく叱

責されたり、罰金を科されたりする者もおり、心身の抑圧も小さくなかった。このような状況で、彼女たちは自己順応して圧力を軽減することを学ぶしかなかった。たとえば初期の教官の多くは中国大陸の各省からやってきており、訓練を受ける者は往々にして彼らの話す方言交じりの国語（普通話）を聞き取ることができなかったので、もしすべきことができなかった時には、言い訳をして何もしないことにもなった。筆記試験の時には、字のわからない女性はカンニングするしかなく、別人の回答を写し、みんなも互いに協力した。女性の中には、演習は模擬にすぎず、戦争になったらこれらの基本的な防衛訓練はまったく役には立たないのだから、普段の訓練は適当にやって、まじめにやる必要はないと思う者もいた。これらは女性が家事労働と民間防衛訓練の間で直面していた、役割、時間配分、体力負担等の面での板ばさみ状態（dilemma）を反映しており、基層庶民が採った「上に政策あれば、下に対策あり」という社会順応の集団心理をも現している。

この他、金門防衛司令部と民防自衛隊総隊にとっては、一九七四年から始まった男女の隊員の建国記念閲兵式への派遣が重大なことだった。当時、婦女隊は毎年八月初めに金湖の「第二士校」に集まり、士官と同様の厳格な集中訓練を受け、その過程で体力の及ばない者や成績の及ばない者を淘汰した。訓練が終わると、一〇月初めに軍用運輸艦で高雄に行き、さらに北上して台北に行って閲兵に参加した。入選者にとっては、この過程は非常に苦しく、多かれ少なかれ抵抗する心理が生まれた。しかし、特殊な社会集団として特殊な文化儀式に参加し、特殊な権益を享授することで、入選者は往々にして排斥、抵抗の心理から転じて一種の光栄感、帰属意識を持つようになり、女性の中には数年間連続で自主的に参加する者もいた。

これらのアイデンティティの形成は多くの結果によるものである。まず、閲兵に選ばれた婦女隊は、外形的には一定の基準があった。厳格な訓練を終えられたことは、絶対に個人にとって肯定的なことであり、栄誉でもあった。しかも金門を代表して全国の注目が集まる舞台で演じることは、国家が作る愛国的、規律的戦地精神の再現でもあった。この他、建国記念閲兵の集中訓練では、一般の民防婦女隊の訓練とは異なり、軍が二ヵ月の給料を支給したが、その待遇は当時の一般のサラリーマンよりもよかった。活動が終わると、一〇日の休暇があり、台北で遊ぶことができた。当時、容易に台湾本島に行くことのできない女性にとっては、これこそ一種の特権だった。多くの成績良好な隊員は、軍の奨励の下「女青年工作大隊」「政戦隊」などの軍職に出願して、さらに保障のある仕事を手に入れることができた。このため、建国記念閲兵をめぐる状況は、軍事教化の一方的な過程というよりは、特殊な歴史が生み出した多方

向的で複雑な社会集団のアイデンティティの形成過程だった。

一九五八年の『正気中華日報』の文芸欄に、「無尽年華――一個婦女隊員的日記」という長編の連載が載った。そこには、一人の若い女性が婦女隊の訓練を受けた心理的過程が表されていた。[*31] この呉華という金門の少女は次のように述べている。中学校を卒業後、家で農作業を手伝い、小さい時から村のお姉さんたちが婦女隊に参加しているのを見て、憧れを抱いていた。一六歳になり法定年齢に達すると、彼女は婦女隊に加入して学習と訓練を受け、女性の独立自主と愛国敬軍の重要性を認識した。彼女はまじめに参加したが、かえって父親から叱責された。「一七、八の娘が兵隊と一緒にいるなど、とんでもないことだ。しかも我が家には大きな子どもは一人しかいないのに、家の仕事は誰が手伝うというのか?」。[*32] しかし、すでに〝近代〟女性の意識を備えていた彼女は、婦女隊の各種の活動に参加して伝統的な束縛から脱しようとし、父親にひどく殴られてもその意志を変えなかった。その結果、彼女の成績は良好だったために婦女隊の幹事に選ばれた。物語の最後には、彼女が従軍して国に報いることを決め、女青年工作大隊に出願し、ついに父親を感動させ許しを得るということになるのだった。日記の中のヒロインは、最後は〝忠孝両全〟を手に入れた。これは軍が公開した（あるいは虚構の）文章であり、さらなる分析の価値がある。ひとつは、これは意外にもひとつの事実――地方社会は女性が民間防衛訓練に参加することに反対しており、愛国主義によって人民を教化して、彼らに国家の政策を支持するように転化したにすぎないということを暴いている。二つ目は、婦女隊の訓練課程が一種の啓蒙的近代化の過程であって、自分を高めることができるということを強調しており、社会軍事化の正当性を強化する口実になっている。三つ目に、物語を整理すると、軍事政権は血縁のある父親よりもさらに信用に値し、国家の家父長的な指導（paternalistic leadership）を心に刻めばさらによい前途が開けることを暗示していた。

つまり、軍事統治の権威主義的体制下においては、地方社会がこれらの制度的な国家的暴力に対抗する策はほとんどなかった。しかし、ジェンダー政策の操作により、女性は合法的に軍事的任務を拒否し、自主的な空間を守ることができた。この部分はまさに男性には欠如していたものだった。ジェンダー政策はまた、国家と地方社会の間の支配／反支配の競い合う場（contested space）であるが、長期にわたる訓練の集団的記憶について見れば、一部の婦女隊および金馬自衛隊に参加した女性には一種の特殊な、社会集団としての意識と光栄感が形成された。この種の戦地女性の複雑な抵抗、離散、順応、帰属意識形成の経験は、〝軍民同心〟という国家の論理の下では隠されてしまいがちで

あるが、追究する価値のある部分である。

3 訓練と懲罰——女性の身体美学の議題の公共化

一九五〇～六〇年代、軍は〝改良風俗〟の名の下に女性の身体の装いに関する各種の規範および罰則を制定した。まず、一九五一年三月、全島の女子小中学生に「パーマ、化粧を禁止する、今後もし女子学生が規定に違反したら、各校の校長を管理不行き届きとして処分する」という通令を出した。[*33] 同年五月には一般の社会における女性管理の領域をさらに拡大し以下の指示を出した。「金門警察所は上級長官からの指示を受けた。金門地区は前線であり、一切は戦時の要求に合わせなくてはならない。……女性のパーマを厳禁し、もし違反する者がいれば、警察が一律に追及する。本島の女性は自ら身を慎み、法の網から逃れようとしないように」。[*34] 実際のところ、一〇〇年以上にわたる豊かな華僑送金に基づく経済の恩恵を受けてきた金門人の物質的な生活水準は、閩南地区ではトップクラスであり、彼らは海外の物質文化とも広く接触していた。一九四九年に戦地になってからは、民間の贅沢な風習をなくし、戦地の困難克服の精神を実践するという理由で、女性の日常的な装いは非法行為と見做されるようになり、国家の取締りと処罰を受けるようになった。

一九六一年、軍は女性の髪型を改良しようとしたが、違反者は処罰するのではなく勧告を与えるという形式に変えた。「司令官は本県の民俗を整え、女性の髪形を改良するために、金門県委員会婦工組に全県の奇妙な髪型の女性を調査させ、もし頭髪が長すぎたり髪型が奇妙な者がいれば、一律に登記して改正するように勧告する」[*35] として全面的に金門の女性の髪形を調査して〝改正〟させようとしたのである。これは国家が合法／非合法の区別を放棄して、一種の正常／異常の二分法で女性の身体美学を取り扱い、さらに教化していこうという改造過程を進めていったことを表している。

国家、統治術と身体コントロールの理論は、欧州の学者ルイ・アルチュセール（Louis Althusser）とミシェル・フーコー（Michel Foucault）により多くの啓発が与えられている。簡単にいうと、前者は国家のもつ機械生産的イデオロギーが一種の内在化された眼差しであり、身体に対するコントロール（body-snatching）とそれへの召喚（interpellation）を通じて、統治階級の利益に迎合させ、さらに個人を特定の主体にさせると指摘している。[*36] 後者はさらに一歩進んで眼差しの権力性という観念を広げて、ジェレミー・ベンサムが設計した〝全体を見渡せる〟（the panoption）監獄を分析し、普遍化、規範化、論理化された教化権力技術の体現である、国家の統治術

（governmentality）の運用について、ここでは教化と懲罰が論理化された暴力の抑圧メカニズムであるのみならず、さらに相当に複雑な社会機能を備えていることを暴いた。この種の統治術は監獄で用いられるのみならず、工場、学校、軍営、病院、スラムなどを含む社会の各方面に拡大されている。[*37]

これらの理論を援用すると、我々は軍事近代化の過程で、国家がややもすれば贅沢を抑制し、風俗を改良するという〝進歩〟の理論で女性の身体を「見つめ」、また規範を制定して彼らを改造してきたことに気づくだろう。この種の統治術の確立は、一方では地方社会を軍隊と同じと見なし、固体の差異を消して国家に支配される全体を構築しようとしていたことを示し、そのため女性の身体美学は伝統的な私的領域から公共の議題へと変化し、また教化と懲罰の二重のモデルで、国家が到る所に存在するというミクロ権力（micro-power）を拡げていった。もう一方では外からの眼差しを個人の内在的な自己監視に転化させ、戦地社会の日常生活に適合する枠組みを築き、また懲罰を利用して女性に自発的に規則を遵守させた。このため身体の教化自身は目的ではなく、国家の意図は権威に服従するイデオロギー的な教化を形成し、その統治の有効性を遂行することにあった。女性の身体美学の議題の公共化は、国家権力が日常生活の領域に介入していくひとつの例証でもあった。

しかし、この種の個人の身体に関するミクロ的なコントロールは長期間執行することはできない。一九五〇～六〇年代と比べて、一九七〇年代の金門の世帯所得は安定した軍人消費の市場経済のもとに成長し、軍事的な対峙という緊張した雰囲気もまた次第に低下した。社会のムードも相対的に開放的になり、前述の身体美学の教化はだんだんと貫徹することができなくなり、婦女隊の訓練期間のみになった。新聞上の広告には女性消費者のための染髪剤や美容院の広告が載るようになった。ここに市場経済が国家の政策を緩め、ついにこれに放棄を迫る過程を見ることができる。女性はその身体的自主権を回復する自由を得て、美しい外観の追求はもはや非道徳なことでも、ましてや非法なことでもなくなった。

Ⅲ 人心を慰め、欲情の対象となる柔美な女性

1 戦地社会の人口の性別構造およびその課題

一九五六年、金門が戦地になってから最初の人口調査が行われ、その後、五年ごとに一回行われた。統計は烏坵郷

表２ 1956 ～ 1992 年の金門の居住人口および性別比率（５年ごと）

年度	現住人口			兵役年齢男子（16 歳以上）	兵役年齢女子（16 歳以上）	学齢児童
	合計	男（比率％）	女（比率％）			
1956	45,234	22,495（49.73）	22,739（50.27）	8,593	5,064	9,210
1961	47,528	24,248（51.02）	23,280（48.98）	8,643	5,140	8,572
1966	56,842	28,754（50.59）	28,088（49.41）	8,822	5,791	11,502
1971	61,305	30,794（50.23）	30,511（49.77）	8,717	5,807	13,335
1976	58,743	30,141（51.31）	28,602（48.69）	11,688	8,899	16,272
1981	50,248	26,047（51.84）	24,201（48.16）	12,112	7,357	13,034
1986	47,779	24,656（51.60）	23,123（48.40）	11,482	8,110	10,555
1991	43,442	22,506（51.81）	20,936（48.19）	11,238	5,362	10,189
1992	44,170	22,991（52.05）	21,179（47.95）	11,708	7,130	10,004

出典：金門県政府主計室『中華民国 91 年金門県統計年報』第 49 期、金門：編者自印、2002 年。

――福建省の莆田の外海の大坵および小坵の二つ小島に位置する――までもカバーしていた。一九六六年から人口数と性別の割合の他に、職業、兵役年齢の男女、学齢児童、華僑および華僑家族の人数調査も行われるようになった。人口統計から見ると、一九六六年以降はゆっくりと増加し、五万六八四二人から、一九七二年には六万一九七六人に増加してピークを迎えた。その後、青年学生の就学、農村の余剰労働力の就業等で、台湾本島への人口の流出現象が見られた。一九九二年の戦地政務解除の前夜、金門の人口は一九五六年の総数には及ばず、社会発展の停滞が顕著になっていた（表２）。

数字から見ると、金門の性別比率は一般の台湾本島の非都市部と比べて顕著な相異はない。しかし、常駐する軍人の数を加えると、性別比率の不均衡問題がはっきりと現れる。一九五〇年当時を例にすると、金門の兵力配置は二二兵団司令李良栄の部隊が主力で、金東、金西、烈嶼の三つの防区に分かれており、「陸軍約八万人余り、海軍艦艇九隻、空軍機がのべ二百機余り」[*38]という陣容だった。この八万の部隊を住民の人数に加えると、男性比率は総定住人口の八割を超えた。

米国の国立公文書館（ＮＡＲＡ）には一九五四年のＣＩＡ（Central Intelligence Agency）の金門、馬祖に関する文書があり、当時の軍隊は四万二一〇〇人、ゲリラ部隊は

六千だったことが記載されている。[*39] これは現在までに公開されている資料の中で軍隊の人数を最も正確に記録しているものである。これに基づいて計算すると、男性が総定住人口の七五・六四％を占めていることになる。一九六五～八〇年代には依然として四個の守備師団（四～六万人以上）、一個の本部予備隊の増強師団（約二～四万人）が配置されており、人数は推定六～一〇万人以上に達した。つまり、一九八〇年代以前、軍隊を入れた金門の総定住人口に占める男性比率は七五％前後だった[*40]のである。

さらに一五歳以上の男女数を既婚女性を除いて計算すると、結婚適齢期の性別比率はいっそうかけ離れていた。一九六六年を例にすると、一五歳以上の総人口は二万七一〇九人で、そのうち未婚男性は三七二八人、未婚女性は一六八八人、既婚男性は八六五一人、既婚女性は九三五三人だった。[*41] 当時の八万の国軍を加えると、四九・六人の男性に対して婚姻対象となりうる女性は一人しかいなかった。一九五五年からは「交替制度」[*42]が実施され、外島および衛戍部隊への駐留は二年間で一回交替となったが、閉鎖的な前線の島では、このようなアンバランスな性別比率が生み出す緊張関係、および武力を持った軍人が庶民の集落に入ってくるというのは、[*43] 確かに潜在的な不安をもたらす社会問題だった。

まず、戦地政務期にはいくつもの重大な軍紀問題が起き、死傷者も出た。たとえば一九五三年には部隊指導員の長期の圧迫を受けた炊事兵銭金山が逃亡し、呉厝村の著名な金門の画家李家錫の家に逃げ込み、包囲して捕らえる過程で李氏の祖母と姉が殺害され、当該炊事兵も拳銃で自殺した。事件後軍は賠償の責任を十分に果たさず、現地では「呉厝事件」と呼ばれた。また、軍人の間で当地の女性をめぐって妬み合い、男女問題で殺人事件に発展した例もある。[*44] このほかに、軍人のセクシャルハラスメント、少女や女性の暴行事件もしばしば起こった。大多数の情報は封印されたが、地方社会の口コミによる情報伝達は広く、そして早く、金門女性の軍人に対する恐怖心をうんだ。[*45] 大量の血気さかんな若い軍人が閉鎖された島に長期に駐留すると、性（sexuality）こそが必ず直面する社会課題だったことがわかる。

また、徴兵軍人と地方の女性の感情的な揉めごとも時々生じたが、初期の軍民雑居と戦地の閉鎖化は問題をさらに大きくした。金門で最もよく聞かれた噂話には次のようなパターンがあった。金門で服役していた台湾籍の徴兵軍人と金門の女性が交際するが、ある者は出身について嘘を言い、退役して台湾に戻るとまったく連絡がなくなってしまった。またある兵士は自分の家庭は非常に裕福だと嘘をつき、金門の女性に裕福な家庭に嫁げると誤解させたが、台湾本島に行って初めてまったく違ったことに気づいた。

この種の結婚詐欺のような経験により、金門の家長たちは、騙されないように絶対に徴兵軍人に嫁がないよう家族の女性を戒めた。この他、軍人が現地の女性の「美人局（つつもたせ）」に引っかかって、賠償金を払ってようやく逃れることができたという例もあった。軍人の間でも「金門の女性を妻にするとこの島に一〇年留まって兵役につかなくてはならない」という実際には存在しない規定が噂で広められ、感情的な揉めごとの発生を脅かして防いだ。

しかし、歪んだ性別構造の下で金門の女性の婚姻関係での選択権は増え、一九八〇年代以前は多くの女性が志願役士官に嫁ぎ、個人および家庭経済を改善させた。これらの金門に常駐する職業軍人は、中国大陸から撤退して台湾を防衛し、前線に派遣されてきているのだった。彼らには安定した収入があり、部隊にしたがって交替する必要のない者もおり、経済的保障を求めていた女性にとっては非常によい結婚対象だった。「部隊で食事を管理している士官長に嫁いだほうが、中隊長や大隊長に嫁ぐよりもずっといい」と考える女性さえいた。[*46] その原因は、これらの家族は新鮮な米、麺や肉類を食べることができ、夫が第一線に出て戦うリスクもなかったからである。職業軍人と当地の青年との競争も相当に激しかった。[*47] このほかに、一九四九年以降「三八」結婚制度が普及した。男性は必ず「八」両の黄金、「八」百斤の豚肉、「八」千元の現金を結納とする風習であり、経済的に弱い当地の青年は結婚したくてもできなくなったが、そこには彼らの配偶者選びの困難さが反映されていた。[*48]

一方、勤務の負担が大きく、休暇が少なく、親族に会うために台湾に帰ることもできず、[*49] 娯楽も乏しく、性的に抑圧された（sexual repression）軍隊生活は、軍隊内部の秩序の崩壊や軍隊と民間の関係を緊張させる導火線となった。軍は一九五九年に成功の陳景蘭洋楼および金湯公園に「将兵レジャーセンター」をつくり、成績優秀な将兵に「栄誉の休暇」を与え、ここで一〇日間の「休暇」を過ごさせた。しかしこの種の軍が提供する、標準化された、模範的なレジャーセンターは軍隊の監視からはまったく離れておらず、さらにレジャーの雰囲気も欠如しており、ここでの「レジャー」は少しも休まるものではなかった。このため、多数の軍人に国家が認めた娯楽を提供し、長期的な緊張による心身のストレスを解消し、さらには彼らの性抑圧問題を解決することは避けては通れない課題だった。

引き続き、我々は軍が提供した慰問活動および特約茶室について考察し、レジャー娯楽におけるジェンダー政治の作用について分析する。

2 人心を慰めるレジャー娯楽——慰問活動

慰問活動は軍では最もよく見られるレジャー娯楽であり、当時の軍人にとっては食事に一品加えられるだけでなく、パフォーマンスを見ることもできた。慰問活動は一種のお祭りだった。

活動の性質によって、慰問は慰労とパフォーマンスに分けることができる。前者は主に婦聯会や各地の関係団体、海外の華僑団体、民間組織などの慰労活動であり、部隊に民生物資を慰労品として送ったり料理のための資金を送ったりした。また軍の動員のもとに、金門の女性や学生の代表が負傷兵を慰問する活動も行われた。後者は主に「中華民国軍人之友社」（軍友社[*50]）が管轄する文康工作隊（文工隊）、軍の政戦体系に属する「国軍戦闘文芸工作隊」（芸工隊[*51]）、国防部の女青年工作大隊を通じて各地の劇団や芸能スターを招待し、部隊で催し物を行った。一九七六年七月、金門戦地政務委員会は金門文化工作隊を設立し、慰問パフォーマンスを担当させた。規模が比較的に大きい慰問は、普通は慰労とパフォーマンスを両方兼ねていた。

写真20 1951年の春節慰問演芸会（『正気中華日報』1951年3月1日第4面）

写真21 名優顧正秋の上演（『正気中華日報』1951年3月1日第4面）

一九五〇年代は戦局が緊張しており、慰問活動の娯楽的要素は低かった。一九五一年三月一日、京劇の名優顧正秋と張正芬が台湾省の各界の春節前線慰問団とともに金門で上演し、また金門中学の蔣介石記念堂竣工のテープカットの来賓となった。当時の新聞の写真から見ると、これは演芸会という名目でなされた活動であり、整列した軍人は銃を担いで、整然と地面に座り、前方の舞台は簡単な木造で、士官は前のほうで鑑賞し、女性の出演者はマイク設備もない環境でパフォーマンスしていた（写真20、21）。この種の大型の慰問活動は、レジャー娯楽の効果に欠け、かえって戦争時期の困難な環境と厳粛な雰囲気を再現することになった。

一九六〇年代以降、文工隊や政戦芸工隊、あるいは中国国民党各支部付属の文化工作隊によって行われる慰問活動

の一部は、次第に活力をもち、リラックスしてきた。これらの慰問を担当する団体は女性を募集して訓練し、中には金門の女性の応募もあった。彼女たちは歌って踊って楽しい雰囲気を作るだけではなく、団体活動を主催し軍人たちと交流した。軍の新聞も写真と文章で彼女たちの活動における芸能と甘い外観を報道し、体にぴったりとした旗袍の写真すらあった（写真22、23、24）。また一部の香港映画のスターやミス中国優勝者が金門に慰問に来て、軍人たちの歓迎を受けたこともあった。[*52] 間違いなく、この種の文字や映像による再現方式は女性の身体を物質化している。当局は意図的に「軍の恋人」のイメージを作り出し、暗示による性の幻想を通じて男性軍人の抑圧された欲望を和らげ、満足させ、戦地社会の安定を維持しようとした。

金門の女性も慰問の責任を負わされた。初期は婦聯会、軍友社などが各学校の女性職員や村の代表を動員して異なったルートに分配して島を周って慰問させた。また、各村の女性も民防婦女隊の動員で慰問活動に参加した。[*53] 女性に強制されたこれらの義務は、軍事近代化が決して近代的な意味を持った女性解放運動ではなかったことをまさに示している。

一九七〇年代から、台湾にテレビや映画が普及すると、一部の著名なスターたちが団体で金門に来てパフォーマンスをして軍人や民間人を慰問するようになったが、なかでも女性のスターはとりわけ人気があった。[*54] しかも、それぞれの時代に一世を風靡した林青霞（ブリジット・リン）、崔苔青、白嘉莉、鳳飛飛、鄧麗君（テレサ・テン）などが慰問に訪れた。彼女たちはパフォーマンスの他に親身になって前線の軍人や民間人と交流し、サインをし、一緒に写真を撮った（写真25、26）。芸能人の慰問公演は、情報が少なかった当時の前線の軍人や民間人に流行の娯楽文化をもたらし、一時的にお祭りのような楽しい時間を作り出した。

鄧麗君の慰問活動は、戦地時期の慰問パフォーマンスの代表的なものだった。甘い外見と完璧な歌唱力を持つ彼女は、一九八一年に金門に招かれ、軍慰問番組「君在前哨」を収録し、中国大陸が管轄する角嶼から二一〇〇メートルしか離れていない「馬山呼びかけステーション」から、大陸の沿海住民に向かって放送を流した。彼女の写真も空を漂う宣伝弾にされて中国大陸へ送られた（写真27）。当時彼女は台湾、香港、日本、東南アジアなど各地で大勢のファンを獲得し人気絶頂だったが、彼女自身が「自由な祖国の第一前線」と呼んだ金門に自ら何度もやって来て慰問をし、軍人と民間人に深い印象を残し、愛国芸人および「永遠の軍の恋人」という栄誉を手に入れた。鄧麗君の奥ゆかしく、人の心を打つメロディーと歌声は、金門の放送を通じて中国大陸にも伝えられ、同様に改革開放初期の中国の

庶民の心を捉えた。中国では民間に「昼間は老鄧（鄧小平）を聞き、夜は小鄧（鄧麗君）を聞く」という言い回しがあるが、これは鄧麗君の人気のほどをよく伝えている。鄧麗君の愛国的な情熱は彼女を「敬軍愛国」の代弁者にした。柔美な女性のイメージは、まさに一九八〇年代の海峡両岸の民間社会が必要としていたものであり、文化大革命で傷ついた中国、戦争の脅威にさらされた金門、社会変革と再構築の過程にあった台湾の庶民の心を慰めたのであった。

3 コントロールされた性的歓楽
――〝特約茶室〟の出現

戦地のジェンダー政策で最も論争を引き起こすのは「特約茶室」の設立である（「軍楽園」あるいは「八三一」[*55]ともいわれる。以下では特約茶室の名称を用いる）。軍は将兵へのレジャー娯楽の提供と地方の善良な風俗の維持という二つの関連のない理由により、軍経営の妓楼を相次いで開設した。これらの多くの社会機能を備えた国家の言説の背後には、軍人の性抑圧とそれに伴う軍紀の乱れ、そしてそれによる現地女性への暴行が発生することを避けるという課題に対応するものだった。特約茶室の存在は、一方では軍人の情欲（sexuality）に関わるジェンダー政策の実践であり、もう一方では戦地社会に特殊な役割を持った外来女性の一群――セックス産業に従事する従業員をもたらした。

一九五一年一〇月一六日、金門の金城に「仁武特約茶室」がオープンした。ここは、金防部政五組によって管理され、憲兵が派遣されて秩序が維持された（写真28）。一九五四年から金門本島の庵前、成功（陳坑）、小徑、山外、沙美（当初は東蕭に開設）および烈嶼の青岐、後宅、東林などに特別茶室が続々と開設され、また安歧の移動茶室および外島（大胆）の巡回サービスステーションも開設された（写真29、図1）。このうち金城が総本部であり、庵前は将校専門だった。

開始した当初は茶室は軍が主導し、法的な根拠もなかった。しかし制度ができておらず、責任者と経営者の権力が大きかったため、無銭飲食、無銭売春や経費の水増し、濫用、帳簿の不実記載などの問題が常に発生した[*56]。一九六〇年に「台湾省各県市娼妓管理辦法」が公布されてはいたが、一九六八年になってようやく軍はこの法律に基づいて「特約茶室管理規則」を制定し、請け負い商人と軍関係者の癒着と権力濫用が断ち切られた[*57]。

特約茶室は甲乙丙の三クラスに分かれており、組織編制に基づくと、金門には毎年少なくとも一二〇人の従業員（侍應生）がいたと推計される[*58]。従業員は台北の募集ステーションによって募集され、自発的に応募した者で、一八～三〇歳の、未婚で家庭の揉めごとがなく、身体が健康で犯

写真 24 国民党公路支部第三文化工作隊の大胆島での慰問（『正気中華日報』1965 年 9 月 19 日第 2 面）

写真 23 金城政戦隊――「烈嶼三鳳」（『正気中華日報』1972 年 2 月 2 日第 2 面）

写真 22 金城政戦芸工隊と兵士のダンス（『正気中華日報』1968 年 1 月 27 日第 2 面）

写真 25 慰問のために歌う陳今佩（『正気中華日報』1971 年 1 月 17 日第 2 面）

写真 27 中国大陸を漂う宣伝弾となった鄧麗君の写真（翁沂杰氏提供）

写真 26 軍人のためにサインする女性スター（『正気中華日報』1974 年 7 月 16 日第 2 面）

軍樂園
今日開幕
（本報訊）當局爲適應前方戰士需要所設置之軍樂園，響備經月，業已就緒，今日開幕，凡本島各部隊官兵，合符遊園規定者，均可自由購票入園。

写真 28「軍楽団」開設のニュース（『正気中華日報』1951 年 10 月 16 日第 4 面）

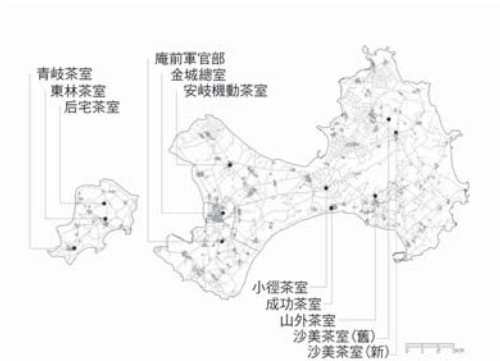

図 1 金門の特約茶室分布図

写真 29 庵前の特約茶室（金門県政府「胡璉将軍珍蔵文物」写真類：編集番号 E074）

罪歴がない、といった条件に符合した者であった。[*59] 軍は多くの従業員管理規則を制定し、定期的に健康検査を受けること、外部宿泊、賭博、泥酔の厳禁、私用電話の開設の禁止、将兵や公務員、民間人との私的会合や金銭の揉めごとの厳禁、軍事機密を尋ねたり、公務や軍事情報を聞くことの厳禁、初めて金門に来た場合は半年経ってからでないと休暇を申請することができないなどの規則があった。審査基準は厳格で、なかでも毎月のチケット売り上げが三ヵ月連続で三〇〇枚以下であった者は台湾に送り返された。経費面では、七〇％が従業員、三〇％が請け負い商人の取り分となり、食事や宿泊場所は請け負い商人が提供した。[*60] 軍人以外、一般の民間人は特約茶室には入ることができなかった。茶室はまた軍人の階級によって佐官級、尉官級、士官兵の三種に分かれ、チケットの値段も異なっていた。一九七一年には家族のいない公務員も庵前の茶室に入ることができるようになったが、それは「生活を調整し地方の善良な風俗を維持する」ためだとされた。[*61]

特約茶室の多くは町や集落の傍らに位置したが、軍は極力両者を隔離しようとした。従業員は医師の診察を受ける以外は普通自由に外出することはできなかった。日用品が不足すると、茶室の雑用係や洗濯女性に代わりに買いに行かせ、新年の休暇にようやく何組かに分かれて外出し廟に参拝したり町で新しい衣装や化粧品等を買うことができた。普段は住民との接触は非常に少なかった。このように控えめであっても、やはり保守的な民衆の非難は免れなかった。

保守的な地方社会にとって、特約茶室の出現は矛盾と板ばさみの心理を作り出した。住民は道徳的な観点から茶室は善良な風俗に反していると考え（これは軍の設立主旨とは正反対である）、また多くの茶室が祀廟、学校などの神聖視されている空間の近くに建てられており（庵前特約茶室は孚済廟の付近、金城総室は朱子祠、キリスト教教会、中正国民小学の後方）、庶民の心理的な衝撃は非常に大きかった。これらの意見は一九九〇年一一月三〇日に国防部が特約茶室を強制的に営業停止にした際に反映されたが、地方の実力者と業者には存続を求める意見もあった。一九九一年金門県諮問代表会の提案では「最近数ヵ月間に、金城などの地区で数件の軍人による強姦事件が起き、すでに地域の家庭と個人を傷つけている」、「公共の安全秩序を確保し、善良な風俗を維持するために、特別に娼妓管理辦法を研究して軍の楽園『八三一』に代えて女性の安全を保障するように政府に要請」した。[*62] 業者も金門県政府に上申書を提出し、「……長年民間の風俗が純朴で、社会が安定し、性犯罪の発生が非常に少なかったのは、『軍の茶室の存在』のおかげである。……茶室の廃止は金門地区の未来に社会風紀の乱れや傷をもたらすのではないかと憂慮される。私

たちは共同で資金を募り、茶室の跡地で営業を行うことを願う……」[*63]とはっきりと述べている。そのため、福建省政府[*64]は特別に「福建省金門県管理娼妓辦法草案」を制定し、民間に妓楼の開設を許し、「妓楼を一戸から三戸開設する。一戸あたりは二〇人以内とし、大金（金門島）の東西の半島には各一戸、小金（小金門）には一戸とする」とした。[*65]そのため、一九九一年初に公営の特約茶室は民間の妓楼になり、一年近く続いたが、一九九一年末に中央の法令に抵触していたため営業停止を迫られ、四一年の歴史に幕を閉じた。

営業の継続要求は、実際は商人が自身の利益を守るための口実だった。意図的に特約茶室の役割を大きくして、それが一種の〝必要悪〟（a necessary evil）であると見なしたのである。特約茶室の存在によって女性の心身の恐怖感が完全に解消されたわけではなく、なかには比較的に流行の装いをしている女性が軍人に「茶室」の従業員と誤解され、思わぬ厄介ごとに巻き込まれることもあった。同時に、特約茶室と善良な風俗の維持はまったく関係がなく、その存在がかえって地方の感覚を気まずいものにした。中正国民小学の校門付近にあった金城茶室では、下校時間になると男子生徒たちが教師に隠れて、こっそりと椅子を運んで壁をよじ登り、ヘルメットの軍人が茶室の部屋の外で並んでいたのを覗き見ていたという。これはみなの共通の回想であり、当時の生徒同士の議論はまるで性教育の啓蒙のようであった。[*66]庵前の茶室は開浯の恩主陳淵を祀った孚済廟に隣接しており、毎年旧暦二月二日の祭神の誕生日には一族の長老が営業を一日停止して祭祀に影響を与えないように要求していた。さらに、庵前の茶室の敷地内には陳氏の祖先の墓があり、清明節以外は敷地内に入って墓参りすることが許されなかった。[*67]これらの状況は特約茶室と地方社会が常に一種の緊張、対立関係にあったことを示している。

従業員の社会経済的地位は相当に低く、流動性も高く、地方社会とはまったく相容れず、搾取され、底辺の物言わぬ社会集団だった。彼女たちの生活環境は狭い特約茶室の中に限定され、軍隊のように厳格に管理され、ひとたび業績が基準に満たなければ台湾に送り返された。しかし彼女たちの仕事もまた愛国的な行動と見なされた。小徑の茶室の門には「男が戦場で命をささげ、女も献身的に国に報いる」という対聯があり、一種の対句（couplet）で彼女たちの前線での役割を再現していた。そこでは、彼女たちの身体が軍人に提供されるのみならず、国家全体に奉げられていることを意味していた。

〝愛国妓女〟は国家が彼女たちに与えた一種のイメージだった。一九五七年の「風塵侠女黄秀琴」の報道はその一例である。ニュースは台北から来た貧困家庭出身で学歴のない、当時二八歳の従業員を「責任感と勇気と比類ない機

智で、憲兵がスパイXXを捕らえるのに協力し、国家のために大功を立て、政府の賞金一千元を獲得し、千万の軍人民間人の尊敬を受けた」と報道した。彼女は「現在の環境は自分が望んだものはなく、家庭の経済状況が改善したらすぐに足を洗いたいと思っているという。幸いに自由中国の台湾には餓死者は一人もいない。我々は彼女の善良な本性と国家への楽観的な態度と信用をみることができる」[*68]と報道された。従業員の行為は、軍によって愛国には貴賤がないことの見本として宣伝された。実際、このような報道は珍しいものではなく、一九五九年に台湾で発生した「八七水害」に際して、特約茶室の職員と従業員が被災者救援に八千元を募金したとして表彰された。[*69]

つまり、特約茶室は一種のジェンダー政策の戦略と運用の場であった。それは軍と地方社会の間を仲介し、合法的な性歓楽場所を提供した。しかしこの場所は思うままに放任された〝軍の楽園〟ではなく、一種の厳格にコントロールされ管理された特殊な機構だった。従業員は社会経済的な最底辺で、国家のコントロールと搾取を受け、発言権と自己解釈権を持たず、国家に与えられた愛国という単一のイメージを持つのみだった。しかし、特約茶室とその従業員は確かに前線に存在しており、地方社会から受け入れられることはなかった。特約茶室も国家や経営者が宣伝したような偉大な役割を持っておらず、戦地社会で最も隠されれ、最も気まずい機能であった。

4 軍人消費経済における民間戦略——店の女性

大量の駐屯軍がもたらした民生消費は、戦地政務期の金門の民間社会にとって最も重要な経済的なより所だった。一九五〇年代後期から、金門ではいくつかの商業的に栄えた市街が出現した。それらは金城の模範街、中興路、莒光路、新市、沙美、盤山、小徑、陽宅、埕下、烈嶼の東林や西方などで、なかでも新市が最も典型的で、各種の飲食店、フルーツパーラー、特産店、文具・書店、映画館、写真館、理髪店、公共浴場などがあり、軍人に〝金門の西門町〟として知られていた。その他の伝統的な集落にも多様なサービスを行う雑貨店が出現し、軍人に日常品を供給するほか、軽食や軍服のクリーニング、郵便局の代行などの機能を備えるものもあり、ビリヤード場を付設しているものもあった。一九九〇年代初期まで、軍人の消費経済は十分に活発であり、経営内容も次第に多様化していった。地方社会は一種の依存経済（dependent economics）モデルを形成していた。

当初、これらの商店の多くは家族経営だった。軍人の客を呼ぶために、店は競い合って若くて美しい女性店員を雇った。しかし流行の装いをする女性店員は戦地社会

が作らねばならないはずの困難克服の精神に挑戦するものであり、軍は介入して管理しようとするようになった。一九五一年一〇月から、金門県政府は「パーラー」「ビリヤード」「飲食店」「茶室」「理髪」「浴場」などを〝特殊営業〟とし、女性店員を雇うことを一律に禁止した。[70]

一方で、〝非特殊営業〟はこの限りではなく、大々的に女性店員が募集され〝華やかさを競い合った〟[71]（写真30、31）。これらの戦略は確かに経済的利益をもたらし、業績を上げた。軍人たちはこれらの女性店員にあだ名をつけ、たとえば金城の「一二金釵」[72]「郵票皇后」「百貨皇后」「福利皇后」[73]、写真館の「七仙女」[74]、新頭の花「小白菜」[75]など、ひそかに口にして広めていた。

しかし、軍が定義する〝特殊業種〟は決して性産業ではなく、せいぜい一般のレジャー娯楽にすぎない。女性店員の雇用の禁止は、実際はこれらの民間のレジャー娯楽産業を抑制しようとしたものだった。ジェンダー政策の操作では、国家は、慰問活動や特約茶室のような、その政治目的に合致した〝正式〟なレジャー娯楽のみを許し、民間が同様に女性の魅力で商業宣伝することはできなかった。これらは国家が「性」を一種の〝パンドラの箱〟（Pandora's box）と見なし、いったん解放されれば予測不能な災難が起こり、必ず制限しなくてはならないと考えていたことを示している。

皮肉なことに、生活のために、金門の〝特殊産業〟では女性店員の雇用をやめず、アングラ化したにすぎなかった。軍の取締りは時々行われたが、彼女たちが消えることはなかった。[76] 一九七〇年代以降、〝特殊産業〟の制限が取り消されたわけではなかったが、取締まりはほとんど行われなくなった。他方、〝非特殊産業〟では女性の魅力を十分利用して商業競争の手段とした。軍人が休暇で街を歩く時、店の女性に話しかけるのは、祝祭日の慰問のパフォーマンスよりもずっと日常生活的なレジャー娯楽であり、苦しい軍隊生活を慰めた。この種の経営モデルは女性を物質化または商品化しているきらいがあるが、確かに女性に多くの現地での就業機会を提供し、それによって故郷を離れなくてもすんだ。それどころか成功した例も少なくない。彼女

写真30 餅菓子店の軍人の客と女性店員（『正気中華日報』1964年9月20日第4面）

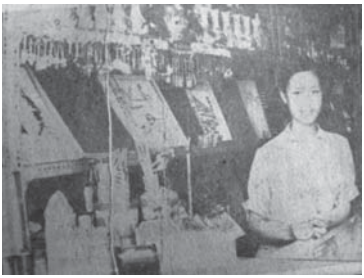

写真31 烈嶼の特産店の女性店員（『金門日報』1971年9月7日第2面）

たちは、初めて、仕入れ、補充、簿記、管理、軍人の呼び込みなど、戦地の経営を学び、資本を蓄積したり、結婚した後に自分で創業し、雑貨店、特産店、飲食店などの小商店を経営したりした。戦地社会の小商品経済の発展の過程で、女性は確かにキーとなる役割を担っていた。

結論——国家／軍人／地方社会の間を仲介するジェンダー政策

戦地政務体制は高度に権威的で、上から下への軍事統治だったが、動員と教化の過程で、地方政治という場は国家が直面しなくてはならない課題そのものだった。「管、教、養、衛」の四つの面で構成される〝軍事近代化〟（military modernization）は、一般に戦地社会の地方政治運営の核心と考えられた。

本文の考察の焦点は、「管、教、養、衛」の過程で、ジェンダー政策こそは欠かすことのできない政策の一つだったということである。つまり国家が社会の軍事化の過程でいかにして新たに〝近代〟的なジェンダー（gender relations）を線引きし、異なる役割を女性に与え、当局のメディアを通してそのイメージを再現したのか、ということを検討してきた。また地方社会および女性個人も軍事化の過程で性別と性に関する政策、女性の身体に関する論理をどのように見ていたのか、また彼女たちはどのようにしてそれらを拒絶、順応して自主的な空間を見つけたのか、あるいは複雑で多元的なアイデンティティ経験を形成したのか、さらに戦地の歴史書では隠されてきた女性の役割について検討をおこなってきた。

軍の新聞資料とフィールド調査に基づき、我々は三つの主要な女性イメージとそこで再現された内容を指摘することができる。それは、生産と再生産の役割での模範的な女性、軍事動員と身体的な教化のもとの戦地女性、人心を慰め欲情の対象としての柔美な女性であった。これらはまさに上述の課題に回答するために構築された分類カテゴリーだった。しかし強調しなくてはならないのは、我々は決して金門の女性の役割を三つに簡略化するのではないし、一人の女性がひとつの役割しかなかったとも考えてはいないということだ。実際は、この三つの分類は国家が軍事近代化の過程で与えた役割であり、多くの女性は同時にいくつもの異なった役割を演じていた。以下では、我々はさらに進んで国家（軍）／軍事近代化／ジェンダー政策の間の相互作用を分析し、戦地社会の地方政治に理解を加えたい。

一、生産および再生産の領域では、軍事近代化は一般の近代化の論理とは異なり、戦地の女性に家庭と国家の二重の責任を同時に負わせ、男女の不平等はいっそう深まった。

軍事近代化の過程では、国家は男女平等を理由に、女性の職業的な技能を養成し、彼女たちが生産および再生産の現場に入ることを奨励した。この時、家事労働、農漁業生産あるいは工業生産ラインの勤労女性は、一種の戦地経済の成果の象徴として再現され、さらに軍事統治の正当性を強化した。そして宋美齢および婦聯会が提唱した政治運動に対応して、「模範的な女性、模範的な母親」が選抜され、さらに「敬軍愛国にして、夫を支え、子を教え、家事をよく行い、困難に打ち勝ち生産する」などの基準が〝良妻賢母〟のイメージを具体化し、女性に〝救国保種〟の良好な公民になることを要求した。それと同時に、国家は女性に家族の世話をするだけではなく、前線を守る軍人の世話をすることを求めた。「縫製軍服」運動はその一例である。

国民国家至上主義の論理の下では、男女平等という概念は軍事近代化の口実にすぎず、国家の真の意図は女性の動員に置かれていた。家庭から出た戦地の女性は個人の自由のためではなく、さらに大きなグループに服従していた。婦聯会の〝模範的な〟女性という言説は一種の父権的、国民的なイデオロギーであり、婦聯会の女性たちが金門の女性に負担するように求めた〝家〟から〝国〟への生産と再生産の役割は、実際は国家の政策を通して性別の差異とその職業分担を理解し、区分する新しい経路を作ったのである。

二、軍事動員の過程で、国家は性別による分類を無意識に自然化し、女性にそれぞれ異なった軍事任務を与えた。ジェンダー政策は国家が用いたのみならず、反対に女性が国家の政策に抵抗する策略手段になった。

軍事動員の過程では、国家の論理は矛盾に満ちており、一方では全民皆兵を宣伝し、一方では無意識に性別による分類を自然化し、女性に異なった軍事任務を与えた。なかでも既婚、未婚の身分はその中のひとつのキーポイントだった。そのため、早婚や養子を育てる等の家庭の責任や月経等の身体的な要素は女性が国家の政策を回避する手段となり、さらに男性にはない自主的な空間を勝ち取ることにもなった。ジェンダー政策の策略は、国家だけではなく、地方社会でも流用された。そして軍事訓練の経験は戦地の女性の集団的な記憶とあり、複雑で多元的な抵抗、離散、順応、帰属意識などの意識に発展した。

このほかに、国家は〝風俗の改良〟という近代化の論理で、正常／異常という二分法を以て日常生活の領域に介入し、「性別の区別を取り除いた」、あるいは「中性化した」女性の身体美学を教化、改造した。この時、女性の服飾、化粧、髪形等の外形はみな軍事統治の一環だった。しかし、この種のミクロ的なコントロールは実行が難しく、一九七〇年代以降はもはや提起されなくなった。

三、性別構造のアンバランスおよび軍人の性的抑圧が引

き起こす社会秩序の崩壊を避けるために、国家は慰問活動を提供してレジャー娯楽とし、また特約茶室で性サービスを提供した。民間社会もまた女性店員を軍人の消費をひきつける手段とした。これらの〝コントロールされた性歓楽〟はみな柔美な女性の性的な想像と身体への搾取の上に築かれていた。

一九四九～一九九二年の間に、大量の駐屯軍と住民が閉鎖された島に暮らし、そこに生まれた性別構造のアンバランス、および軍人の性抑圧が社会問題をもたらした。国家は慰問活動を主とするレジャー娯楽で、女性の柔らかさを人心を慰める道具とした。一九八〇年代の鄧麗君は、海峡の両岸が共有する前線の歴史的記憶にさえなった。

国家は善良な風俗の維持という名の下に、一九五一年に特約茶室（軍楽園、八三二）という、軍の中の妓楼を作り、軍人に性サービスを提供し、その性的抑圧を緩和しようとした。一九六八年から軍は特約茶室の管理を厳格化し、また地方社会の外に隔離した。しかし地方社会では普遍的に特約茶室に対する一種の矛盾、ジレンマを伴なう見方を持っており、それが善良な風俗に反することを心配していたが、それでも、それが担っている社会的な役割を認めざるをえなかった。それと同時に、前述の通り、民間の商店は競って若くて美しい女性店員を雇い、軍人の消費を引き付ける手段とし、国家に特殊産業と非特殊産業を分けざるをえなくさせた。そしてこれらの〝コントロールされた性的快楽〟は、柔美な女性の性的な想像と身体の搾取の上に築かれていた。

ジェンダー政策は「管、教、養、衛」などの面でキーとなる役割を演じ、国家／軍人／地方社会の間を仲介する、統治策略、そして相互作用メカニズムになった。性別と性の議題は戦地社会の一種の地方政治であり、異なった女性イメージと再現を借りてその目的を達成した。しかし、ジェンダーから見ると、軍事近代化は決して真の男女平等という近代的な意味を持っていたのではない。さらには、支配された一部の女性は性別の差異と身体的な特質の条件を流用して国家の軍事動員と規範に抵抗し、自主的な空間を勝ち取った。

最後に我々はやはり、金門の伝統的な戦争史では女性がほとんど見られないということを強調しなければならない。これは軍事化が女性にもたらした衝撃を過小評価しているのみならず、軍事計画における女性の重要性を過小評価している。この時期の女性史を振り返ることは、金門の歴史を全面的に理解するだけではなく、グローバルな比較の視野においても価値がある。我々は、その他の地方と同様に、金門においても軍事の近代性が高度にジェンダーと関連しており、男性と女性の経験も相当に異なっていることをすでに見てきた。軍事の近代性は各自の性別の役割を

強化したが、変化した部分もある。それはまさにキャサリン・ルッツ（Catherine Lutz）の米国ノースカロライナ州フェイエットビル（Fayetteville, North Carolina）での研究において、米国陸軍特殊部隊本部フォート・ブラッグ（Ft Bragg）とともに発展してきたこの都市が、戦場とは相当に離れていながらも、軍事化によって多くのメカニズムと実践を築いてきた[*77]ことにも示されている。

二〇世紀のアジアの他の地方の女性と同じように、金門の女性は国家の目標のために犠牲を求められてきた。さらに、自己犠牲を行った女性は常に国粋（the national essence）の象徴とされてきた。金門で女性が軍人として動員され、国家の実質的な防衛を担当したのは、その極限的な形態である。多くの場合、女性の動員は女性解放の要とされたが、実際には女性が兵士となることは決して父権体制を取り消すものではなく、社会の役割の再分配という傾向を伴なっていた。軍事化がいかに父権体制を再構築し、決してなくなることはなかったということを示すもうひとつの例は、軍における妓楼である。中華民国国軍は他の軍隊と同様に、男性の性需要を満たすために女性をコントロールしなければならず、そうしてこそ軍事効率が下がり軍と民間の関係が悪化するのを防げると信じていた。軍事化は女性をコントロールしなければならない新しい形式だった。

軍事の近代性における性別の処遇は往々にして同じではない。ソーンスーク・ムーン（Seungsook Moon）は、再生産者の役割において構築された支配的な性別イデオロギー――女性が演じているのは主に経済的な役割であり、決して彼女たちが国家の一部ではないということ――から、韓国の公民がいかにして性別化されていったかを説明した[*78]。これは金門と似ているところがあるが、異なっているのは、金門の女性の経済的な役割は、彼女たちの家事における役割と軍人への服務の双方が賞賛されるのである。この点は、おそらく金門の反共闘争の宣伝の象徴という特殊な役割と関係があるだろう。このため、軍事化、近代化とジェンダーの関係は特殊な地域的および地縁政治の脈絡で分析されなくてはならない。

本文はジェンダー政策の実践過程の分析を通じて、戦地の歴史における国家と地方社会の相互関係、およびそれぞれの女性の実際の環境、社会効能と象徴としての意義についてのさらなる理解を試みたものである。

◉注

＊1　李永熾監修、薛化元主編一九九〇、七八頁。

＊2　金門県政府二〇〇九、九九―一〇一頁。

＊3　Michael Szonyi, 2008; p.25.

＊4　Szonyi, *Ibid.*, p.244.

＊5　以上の各領域の重要作品はAccinelli 1996; Chen Jian 2001;

Gong Li 2001; Chang 1990; Zhai 1994; Christensen 1996などを含む。

＊6　たとえば（中国）沈衛平原著、劉文孝補校二〇〇〇、田立仁二〇〇七。

＊7　たとえば行政院国軍退除役兵輔導委員会二〇〇九、国防部二〇〇九など。

＊8　以下のものを含む。（一）余光弘、魏捷茲一九九四、（二）Michael Szonyi 2008、（三）Chi, Chang-hui 2004、（四）江柏煒二〇〇七、（五）川島真二〇〇八、（六）周妙真二〇〇七、（七）蔡珮君二〇〇八、（八）林美華二〇〇八、（九）李瓊芳二〇〇八、（一〇）李雯二〇〇九、（一一）李皓二〇〇六、（一二）呂静怡二〇〇八。

＊9　たとえば以下のものがある。（一）黄振良二〇〇三、（二）江柏煒、劉華嶽二〇〇九、七七―一二四頁、（三）J.J. Zhang（張家傑）& Bo-wei Chiang（江柏煒）二〇〇九、一八七―二二〇頁。

＊10　たとえば一九五一年には「金門県農林試験所」（金門県農業試験所の前身）が、一九五六年には「金門県林務所」が、そして一九六〇年には「金門県牧馬場」（金門県畜産試験所の前身）が成立し、一九六八年には金門県農業試験所の管轄下に「水産站」（金門県水産試験所の前進）が設けられた。

＊11　金門県政府一九九二、一一六九頁。

＊12　作者不明「戦地計画、女子商店」、『正気中華日報』、一九八〇年五月二〇日第二面。

＊13　宋美齢一九七七、八〇三―八〇四頁。

＊14　怒潮学校は民国三八年（一九四九年）に胡璉一二兵団第二編練司令部が江西に設立した幹部訓練班であり、知識青年の従軍を募集した。部隊が江西会昌、瑞金から広東庵埠、汕頭等に移ったのにしたがってこの学校も移動した。民国三八年末に台湾に移り、初め新竹新埔に落ち着き、翌年金門水頭に移った（董群廉等二〇〇三、三六二―三六三頁）。怒潮学校の卒業生の多くは各村の指導員となり、民間防衛組織の訓練を指揮し、金門の女性と結婚した者も相当数いたので怒潮分会が設立された。

＊15　洪国智二〇〇三、五三―五七頁。また、作者不明「代製征衣万件、婦女界発動中」、『正気中華日報』、一九五〇年五月一九日第四面。

＊16　作者不明「婦女反共抗俄会昨已円満閉幕」、『中央日報』、一九五〇年四月二〇日第一面。

＊17　『正気中華日報』の報道にはたとえば次のようなものがある。（一）作者不明「金門婦女代表は二一日に中華婦女反共抗俄聯合会福建分会設立大会を開催することを決定、また女性を動員して軍隊のために軍服を一万着を縫製する」一九五〇年五月一九日第四面、（二）作者不明「金門防衛部婦聯会の軍服縫製の成績は第一位」一九五〇年七月二三日第四面、（三）作者不明「湖前郷の女性が負傷兵のために洗濯」一九五三年八月二四日第四面、（四）作者不明「戦士が国のために苦労しているのに感謝し、浦辺の女性が衣服を補修」一九五七年四月一日第四面など。

＊18　一九五〇年七月五日『中央日報』第七面に方剛という作者が書いた「当我穿在身上」という詩が掲載されているのがその一例である。詩の中では婦聯会の暖かい行動を賞賛し、戦場で敵を消滅させて恩情に報いるとしている。

＊19　作者不明「役場は女性教育を普及させ、婦女教育班を設立する。一八歳以上四五歳以下の女性は一律に参加すること」、『正気中華日報』、一九五一年三月五日第四面。

＊20　『婦女教育班入学規則』第一条「教育班の受講生は以下の場合参加を免除される。（一）一八ヵ月未満の子どもがいる者。（二）家庭の生計を一人で支えている場合（家の中で女性一人が生産をしている場合に限る）。（三）妊娠三ヵ月の者。（四）病気や障害があって参加できない者」（作者不明「役場は実施を徹底し、女性教育を普及させ、入学規則を制定して実施させることを決定」、『正気中華日報』、一九五一年四月一四日第四面）。

＊21　作者不明「烈嶼の新しい風景、女性の知的好奇心がさかん」、『正気中華日報』、一九五一年一月二七日第四面。

＊22　金門県政府一九九二、一二六五―一二六八頁。

＊23　一九六八年九月、金門全県の一五五の自然村で戦術上の必要性から、人口、地形面積、指揮掌握などの状況を調べ、七三の戦闘村に改編し、「軍、政、警、民」を一体化した。また、一九七六年から金門、賢厝、頂堡、安歧、昔果山、后湖、瓊林、成功、沙美、斗門、陽翟、内洋の一二の重要な戦闘村を選んで塹壕を建設した（金門県政府一九九二、一二六八頁）。

＊24　金門県政府一九九二、八五二頁。

＊25　金門県政府一九九二、一二六五―一二六八頁。

＊26　金門県政府一九九二、一二六七頁。

＊27　以下の状況の者は編入を免除された。「（一）身体に疾患があり確実に任務に耐えられない者、（二）高級中学に在籍する学生、（三）精神疾患あるいは精神薄弱で公の医療機関の証明がある者、（四）妊娠二ヵ月以上で医師の証明がある者、（五）配偶者が軍隊に志願しあるいは、徴兵され服役した女性で、家事をする必要がある者、（六）家族が病気で一人で行動できないため、世話をする必要がある者、（七）五歳以下の子どもがいて世話をしなければならない女性、（八）七歳以下の子どもが三人以上いて、世話をしなくてはならない女性」（国立金門技術学院研究小組編二〇〇四、二八七―二八八頁）。

＊28　一九五八年頃に民防訓練を受けた呂旺曾は「民防隊員は軍服を着てはいるが、結局は民防隊であり、肩章もなければ、番号もなく、人にどこの部隊かと尋ねられてもなんと答えていいかわからなかった。後に（制服の制作費が）八元五角だったのを思い出し、とてももったいなく感じ、『八〇五部隊』と自称するようになった」と述べている（林馬騰二〇〇三、六六―六七頁）。

＊29　戦闘村の女性を例にすると、一八～四五歳の既婚女性は勤務隊に編入され、主に心理戦用の放送、文章宣伝、負傷者救護などの後勤任務を担当した。未婚ならば一六歳以上は必ず守備隊に入り、村の自衛戦闘、反降下作戦、軍事勤務支援、捕虜監視などの軍事任務を担当した。両者の差は非常に大きかった。

＊30　呂静怡二〇〇八、九〇―九一頁。

＊31　呉華「無尽年華――一個婦女隊員的日記」（一～一六）、『正気中華日報』、一九五八年八月三一日～九月二一日第四面。

＊32　呉華「無尽年華――一個婦女隊員的日記」（三）、『正気中華日報』、一九五八年九月五日第四面。

＊33　作者不明「各校の女生徒に注意。パーマ化粧を禁止する。

旗の昇降時は敬礼するように」、『正気中華日報』、一九五一年三月二日第四面。

＊34　作者不明「民間の華美な風紀を取り締まり。警察は会議によって女性のパーマを厳禁することを決定した」、『正気中華日報』、一九五一年五月二六日第四面。

＊35　作者不明「奇妙な髪型の女性には、改正を勧告する」、『正気中華日報』、一九六一年三月一三日第四面。

＊36　Althusser 1971, p.62.

＊37　Foucault 1979, p.34, 195-230.

＊38　金門県政府二〇〇九、二一五頁。

＊39　CIA, *The Chinese Offshore Islands*, 8 Sept. 1954, p.3.(CIA-RDP80R01443R000300050008-7, NARA, USA)

＊40　一九八〇年代中期以降、金門の駐屯軍は金東、金西、南雄、烈嶼などの師団編成を維持したが、人数は五万五千人前後だった。駐屯軍の数は一九九七年に李登輝総統が国軍の「精実案」を進めてから大幅に縮小され、わずか二万五千人になった。二〇〇七年一一月、金門では旅団単位を取り消され、兵力は一万人に削減された（許紹軒「金門駐屯軍、最大時には一七万人に達する」、『自由時報』、二〇〇九年六月三日第二面）。

＊41　Szonyi, *Ibid.*, p.162.

＊42　金門県政府二〇〇九、二一七―二一八頁。交代制度の表向きの理由は、「部隊作戦、訓練、労働と休息のバランスをとり、士気を高め、戦力を増強する」というものだったが、実際は国軍の派閥化、地方化を避けるためだった。

＊43　一九四九から一九五八年に、一部の国軍は金門各集落の民間住宅に散居していた。その後兵舎が大規模に建設され、駐屯軍はようやく移転した。

＊44　呂静怡二〇〇八、五六頁。

＊45　周妙真二〇〇七、八四頁。

＊46　陳金枝（一九五四年生まれ）へのインタビュー、後浦珠浦北路許宅、二〇〇八年七月一三日。

＊47　Szonyi, *Ibid.*, p.163.

＊48　魏光森「金門「三八」婚姻制」、『正気中華日報』、一九六二年三月八日第四面。もちろん地方の風習を貶すことは、社会改革の正当性を獲得することに役立つ。そのため軍の「三八制」結納金の風習には政治的な目的があった。

＊49　一九八〇年以前、転属という理由以外、前線の兵士が服役期間中台湾に帰ることはできなかった。一九八〇～九〇代になると、二年間の服役期間中に一回一〇日の休暇のみを許した。金門の非軍用電話も国防の安全を理由に一九九一年になってようやく開放された。前線の兵士は郵便局の書簡で家族と連絡するほかはなかった。

＊50　中華民国軍人之友社は一九五一年一〇月三一日に設立された。社会民衆団体という名目だったが、実際は当時国防部総政治部主任を務めた蔣経国の呼びかけに応じて発足した準政府組織だった。

＊51　一九六五年から、国軍は「国軍新文芸運動輔導委員会」を設立し、学者を招いて政策研究と創作の指導を担当させた。一九六八年五月にはさらに「国軍文芸戦闘工作隊」を設立し、その趣旨は国軍の精神戦力を養うこととされた。

＊52　作者不明「香港スター崔萍昨日金門に到着して軍を慰問、今回は三日間の公演を行う」、『正気中華日報』、一九六〇年一

月一〇日第一面。作者不明「香港映画スター柳声昨日金門に到着して軍を慰問」、『正気中華日報』、一九六〇年三月一七日第一面。作者不明「三人のミス中国昨日金門を訪問、各地で歓迎を受ける」、『正気中華日報』、一九六一年五月二二日第一面。

＊53　作者不明「婦女隊が五つの隊を組織して、定期的に島を回って慰問」、『正気中華日報』、一九五〇年三月二九日第四面。作者不明「軍友社が昨日金城、金山の女性を動員して烈嶼で慰問」、『正気中華日報』、一九五七年四月一七日第四面。

＊54　作者不明「スターの慰問エピソード」、『正気中華日報』、一九七一年一月一七日第二面。作者不明「中国電視と台湾電視の芸能人が金門到着、軍と民間を慰問」、『正気中華日報』、一九七四年一月三一日第二面。作者不明「銀色の隊列、きらめく星、軽やかな歌と踊り、三軍を楽しませる」、『正気中華日報』、一九七四年七月一六日第二面。

＊55　「八三二」は仁武特約茶室の電話が八三一だったためにつけられた名前だといわれている。

＊56　陳長慶二〇〇五、一二二頁。

＊57　「特約茶室の等級を区分け、職員の編成整理、管理職の役職名の修正、管理職の資質の向上、厳格な試験実施、冗員のリストラ、幹部が職権を利用して行う無銭飲食、売春の厳禁、職員従業員の賭博の厳禁、会を開いたり、金の貸し借りをする等の不法行為厳禁の厳禁を実施する。違反すれば、職員は解雇され、従業員は台湾へ送り返される」といった規定があった（金防部「特約茶室管理規則」（七五）才幹字第一三九一号函、民国七五年九月三〇日）。

＊58　特約茶室は三つのクラスに分かれていた。「（a）甲級：収容人数および現在の従業員が二〇人以上のものは管理員一人、雑用係（含む炊事）二～三人とする。たとえば金城、山外は甲級茶室とする。（b）乙級：収容人数および現在の従業員が一五人以上のものは管理員一人、雑用係（含む炊事）二人とする。たとえば庵前、沙美、小徑、東林は乙級茶室とする。（c）丙級：収容能力および現在の従業員が六人以上のものは管理員一人、雑用係、炊事係各一人とする。たとえば成功、后宅、青歧は丙級茶室とする」（金防部「特約茶室管理規則」（七五）才幹字第一三九一号函、民国七五年九月三〇日）。

＊59　陳長慶二〇〇五、一六二―一六四頁。

＊60　金防部「特約茶室管理規則」（七五）才幹字第一三九一号函、民国七五年九月三〇日。

＊61　金門県政府、（六〇）造民字第五五八三号函、民国六〇年四月一二日。

＊62　金門県県政諮詢代表会、（八一）諮議字第三九三号、民国八〇年一〇月二〇日。

＊63　黄玉花等三人陳情書、民国八〇年（日付不詳）、金門県警察局蔵。

＊64　一九四九年以降、中華民国の体制内に福建省政府は存続し、金門、連江（馬祖）の二県を管轄していた。

＊65　福建省政府「福建省金門県管理娼妓辦法草案」、民国八〇年、金門県警察局蔵。

＊66　洪集輝（一九七五～一九八一年に中正国民小学に通う）へのインタビュー、二〇〇六年五月二日日、金門技術学院。

＊67　陳国興（庵前村人）へのインタビュー、二〇〇六年五月

八日、福建省政府辦公室。

＊68　夏裕民「風塵俠女黄秀琴」、『正気中華日報』、一九五七年一月二一日第二面。

＊69　作者不明「「茶」と同情。特約茶室の職員と従業員、被災者救援に八千元を募金」、『正気中華日報』、一九五九年八月一七日第二面。

＊70　作者不明「県政府、特殊営業では女性店員の雇用を禁止し、純朴な風紀を維持することを決定」、『正気中華日報』、一九六一年一〇月九日第四面。

＊71　薛翰勲「映画館は盛況、女性店員は艶やかさを競う」、『正気中華日報』、一九六二年一月二六日第四面。

＊72　謝白雲「闊別四月金城を見る」、『正気中華日報』、一九六二年一二月五日第四面。

＊73　作者不明「金城街頭」、『正気中華日報』、一九六二年三月二八日第四面。

＊74　作者不明「すみやかな進歩を要する金門の写真業」、『正気中華日報』、一九六二年八月一九日第四面。

＊75　張振亜「金湖のエピソード」、『正気中華日報』、一九六二年三月六日第四面。

＊76　作者不明「警察局、山外ビリヤード場の女性店員を取り締まり」、『正気中華日報』、一九六二年二月一日第四面。作者不明「パーラーの女性店員を禁ずる、関係機関は厳格に執行するように」、『正気中華日報』、一九六二年四月六日第四面。作者不明「女性の親族は特殊営業の店員をさせないように」、『正気中華日報』、一九六二年四月二〇日第四面。

＊77　Lutz, Catherine 2001.

＊78　Moon, Seungsook 2005.

◉参考文献（中文筆画順、欧文アルファベット順）

（論文、専門書）

川島真　二〇〇八「金門的軍事基地与僑郷因素的変遷――一九四九年前後的連続与断絶」、林正珍主編『二〇〇八年金門学学術研討会論文集』、金門：金門県文化局、二〇七―二二〇頁。

田立仁　二〇〇七『金門之熊――国軍装甲兵金門保衛戦史』、台北県中和市：大河文化総経銷。

行政院国軍退除役官兵輔導委員会　二〇〇九　『古寧頭戦役参戦官兵口述歴史』、台北：編者自印。

江柏煒　二〇〇七「誰的戦争歴史？　金門戦史館的国族歴史vs民間社会的集体記憶」、『民俗曲芸』一五六期、台北：施合鄭民俗文化基金会、八五―一五五頁。

江柏煒、劉華嶽　二〇〇九「金門「世界冷戦紀念地」――軍事地景的保存与活化芻議」、江柏煒等主編『二〇〇八金門都市計画国際研討会論文集』、金門：金門県政府、七七―一二四頁。

李永熾監修、薛化元主編　一九九〇『台湾歴史年表――終戦篇Ⅰ（一九四五～一九六五）』、台北：業強出版社。

余光弘、魏捷茲（James R. Wilkerson）編輯　一九九四『金門暑期人類学田野工作教室論文集』、台北：中央研究員民族学研究所。

宋美齢　一九七七「婦女節慶祝大会致詞――中華民国四三年三月八日講」、王亜権総編『蔣夫人言論集』下、台北：中華婦女反共聯合会、八〇三―八〇四頁。

李皓　二〇〇六『金門戦地政務体制下的民防自衛体系』、政治大学歴史研究所。
李雯　二〇〇九『従漁村、軍港到商港——金門料羅村及其港口之空間変遷』、金門技術学院閩南文化研究所修士論文。
李瓊芳　二〇〇八『戦地政務時期的金門学校教育』、金門技術学院閩南文化研究所修士論文。
呂静怡　二〇〇八『「出操」的記憶与認同——金門婦女隊員的生命経験叙説（一九四九～一九九二）』、慈済大学人類発展研究所修士論文。
沈衛平原著、劉文孝補校　二〇〇〇『金門大戦——台湾風雲之歴史重演』、台北：中国之翼。
金門県政府　一九九二『金門県志』、金門：編者自印。
金門県政府　二〇〇九『金門県志』続修、金門：編者自印。
金門県政府主計室　二〇〇二『中華民国九一年金門県統計年報第四九期』、金門：編者自印。
周妙真　二〇〇七『官方影像中的金門戦地婦女形象（一九四九～一九七八）』、金門技術学院閩南文化研究所修士論文。
林美華　二〇〇八『傾聴戦地的声音——金門的戦地広播（一九四九～一九九二）』、金門技術学院閩南文化研究所修士論文。
林馬騰　二〇〇三『烈嶼的烽火歳月』、金門：金門県立文化中心。
洪国智　二〇〇三『中華婦女反共抗俄聯合会在台慰労工作之研究（一九五〇～一九五八）』、中央大学歴史研究所修士論文。
許碧霞、許維権編　二〇〇〇『金門島上民防隊事跡及国共戦争戦役調査研究』、金門：内政部営建署金門国家公園管理処。
陳長慶　二〇〇五『時光已走遠』、金門：金門県文化局。
黄振良　二〇〇三『金門戦役史跡』、金門：金門県文化局。
蔡珮君　二〇〇八『従伝統聚楽到〝戦闘村〟——以金門瓊林為例』、金門技術学院閩南文化研究所修士論文。
国立金門技術学院研究小組編　二〇〇四『金門戦地政務的法制与実践』、金門：金門県政府。
国防部　二〇〇九『烽火歳月——八二三戦役参戦官兵口述歴史』、台北：編者自印。
董群廉等　二〇〇三『金門戒厳時期的民防組訓与動員訪談録』、台北：国史館。
Accinelli, Robert 1996 *Crisis and Commitment: United State Policy toward Taiwan, 1950-1955*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.
Althusser, Louis 1971 *Lenin and Philosophy*. Trans. Ben Brewster. London: New Left Books.
Chang, Gordon 1990 *Friends and Enemies: The United States, China, and the Soviet Union, 1948-1972*, Stanford: Stanford University Press.
Chen, Jian 2001 *Mao's China and the Cold War*, Chapel Hill, NC: University of North Carolina Pres.
Chi, Chang-hui 2004 "Militarization on Quemoy and the Making of Nationalist Hegemony, 1949-1992", 王秋桂主編『金門歴史、文化与生態国際学術研討会論文集』、台北：財団法人施合鄭民俗文化基金会出版、五二三—五四四頁。
Christensen, Thomas 1996 *Useful Adversaries: Grand Strategy, Domestic Mobilization, and Sino-American Conflict, 1947-1958*, Princeton, NJ: Princeton University Press.

Foucault, Michel 1979 *Discipline and Punish: the Birth of the Prison*. Trans. Alan Sheridan. New York: Vintage Books.
Lutz, Catherine 2001 *Homefront: A Military City and the American Twentieth Century*, Boston: Beacon Press.
Gong, Li 2001 "Tension across the Taiwan Strait in the 1950s: Chinese Strategy and Tactics," in Robert Ross and Jiang Changbin eds, *Re-examining the Cold War: US-China Diplomacy, 1954-1973*, Cambridge, MA: Harvard University Asia Center.
Moon, Seungsook 2005 *Militarized Modernity and Gendered citizenship in South Korea*, Durham: Duke University Press.
Szonyi, Michael 2008 *Cold War Island: Quemoy on the Front Line*, New York: Cambridge University Press.
Zhang, J.J. & Chiang, Bo-wei 2009 "Normandy' or 'Las Vegas'? Positioning 'Kinmen' in the Post-war (Re) construction Era", 江柏煒等主編『二〇〇八金門都市計画国際研討会論文集』、金門：金門県政府、一八七―二二〇頁。
（公文書・檔案）
金防部、「特約茶室管理規則」〈特約茶室管理規則〉（七五）才幹字第一三九一号函、民国七五年九月三〇日。
金門県政府、（六〇）造民字第五五八三号函、民国六〇年四月一二日。
金門県県政諮詢代表会、（八一）諮議字第三九三号、民国八〇年、一〇月二〇日。
黄玉花等三人陳情書、民国八〇年（月日不明）、金門県警察局蔵。
福建省政府、「福建省金門県管理娼妓辦法草案」、民国八〇年、金門県警察局蔵。
金門県政府、「胡璉将軍珍蔵文物、写真類」編集番号E〇六八、未出版。
金門県政府、「胡璉将軍珍蔵文物、写真類」編集番号E〇七四、未出版。
金門県政府、「胡璉将軍珍蔵文物、写真類」編集番号E〇七五、未出版。
CIA 1954 *The Chinese Offshore Islands*, CIA-RDP80R01443R000300050008-7, National Archives, USA.
（新聞）
『中央日報』
『正気中華日報』
『自由時報』
『金門日報』

（Michael Szonyi／米国ハーバード大学東アジア言語文化学科）
（こう・はくい／台湾国立金門大学閩南文化研究所、米国ハーバード大学燕京研究所（二〇〇九～一〇年））
（あべ・ゆみこ／東京大学大学院総合文化研究科博士課程）